

日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集

かげ ひら い せき  
影 平 遺 跡

都市計画道路園田～平野線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

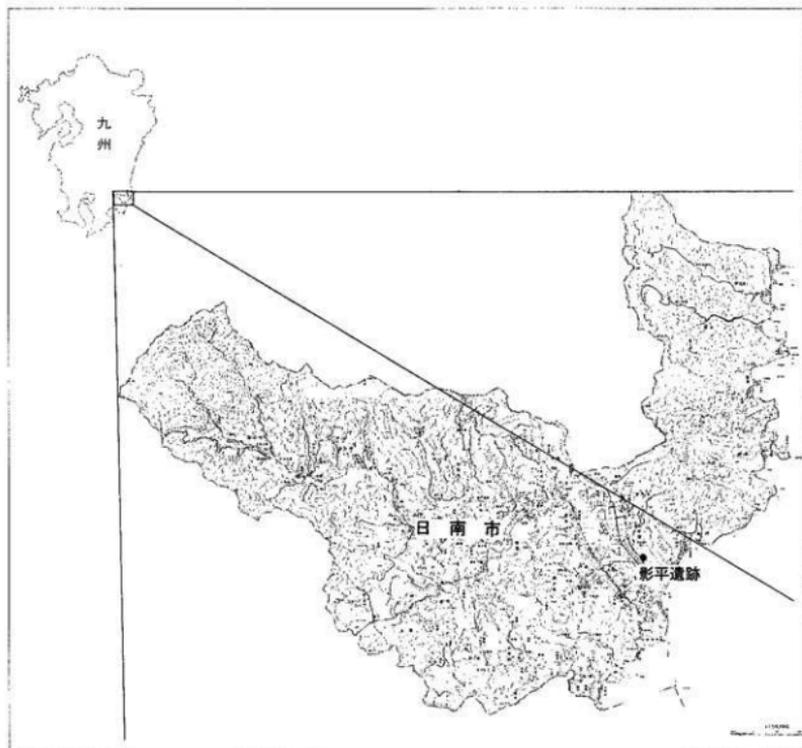
1997. 3

日南市教育委員会

日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集

かげ ひら い せき  
影 平 遺 跡

都市計画道路園田～平野線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1997. 3

日南市教育委員会

## 序

この報告書は、都市計画道路園田～平野線改良工事に伴い平成7年度に口南市教育委員会にて実施した影平遺跡の報告書です。

日南市においては、各種開発事業の計画ある地域において、埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、文化財の保護とその啓発に努めています。

今回の調査では、弥生時代中期を中心とする竪穴住居跡の集落や土壘、柱跡等の遺構、弥生式土器はもちろん土師器や須恵器、青銅製品等多様な遺物も検出できました。日南市内で、弥生時代の集落が検出できたのは、今回が初めてとなります。また、南那珂地域でも初めての弥生時代の集落となります。口南市内には、県内でも最大規模の横穴式石室を持つ「狐塚古墳」や県指定史跡の「細田古墳」「東郷古墳」などが存在しており、古墳時代に先行する日南市、強いては南那珂地域の弥生時代の歴史を解明していく上で貴重な資料となるでしょう。

この報告書が、学術資料としてはもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、生涯学習や教育の場等に幅広く活用されれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力戴きました宮崎県教育委員会を初め、ご支援戴いた関係各位、地元の方々、調査に参加された調査員の方々に深くお礼を申し上げます。

平成 9 年 3 月

日南市教育長 野 邊 行 俊

## 例 言

1. 本書は、都市計画道路園田～平野線改良工事に伴い1995年に実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、日南市都市建設課より分任を受け日南市教育委員会が主体となって行った。

### 3. 調査の体制

調査主体 日南市教育委員会

教 育 長 野 邊 行 俊

社会教育課長 藤 原 英 一

文 化 係 長 岡 本 武 憲

庶務担当 主 事 長 友 恵 子

調査担当 主 事 的 場 丈 明

調査補助 佛教大学学生 和 田 る み 子

鎌田留次郎、鎌田和枝、黒木正男、黒木カヨ、田畑フミ子、  
前田マサ子、福田スエ、大田原俊太郎、谷口キヨ子、太田忠、  
福田福一 他

4. 現地調査は、的場が行った。

5. 現地における実測は、的場、和田、鎌田が行った。

6. 遺物の整理は、代田博文（別府大学学生）、三尾佐智子、高橋寿子、貴島芳栄、出口美智子、谷山英子、谷口キヨ子が行った。

7. 遺物・遺構の実測及びトレースは、的場、和田、谷口、代田が行った。

8. 自然科学分析については、(株)古環境研究所に依頼し、杉山氏による分析結果を掲載している。

9. 空中写真撮影については、(株)スカイ・サーベイ 森氏の撮影による。

10. 方位は、磁北、レベルは海拔高である。

11. 本書の編集執筆は、的場が行った。

# 本文目次

## 巻頭グラビア

巻頭グラビア(一) 影平遺跡全景

巻頭グラビア(二) 影平遺跡B地区住居跡

巻頭グラビア(三) 影平遺跡B地区2号住居跡遺物出土状況

## 第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過 ..... 3

## 第II章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境 ..... 3
2. 歴史的環境 ..... 3

### 第2節 遺跡の概要

1. 調査経過 ..... 4
  2. 遺跡概要
- (1) 基本順序 ..... 6
  - (2) 調査区設定及び遺構 ..... 6
  - (3) 遺物 ..... 6
- ア. 土器 ..... 6
  - イ. 石器 ..... 6

## 第III章 調査

### 第1節 A地区の調査 ..... 13

1. 遺構 ..... 13
- (1) 土壌 ..... 13
2. 遺物 ..... 16
- (1) 土器 ..... 16
  - (2) 石器 ..... 16
  - (3) その他の遺物 ..... 16

### 第2節 B地区の調査 ..... 19

1. 遺構 ..... 19
- (1) 1号住居跡 ..... 19
  - (2) 2号住居跡 ..... 19
  - (3) 3号住居跡 ..... 19
  - (4) 4号住居跡 ..... 20
  - (5) 7号土壌 ..... 20
2. 遺物 ..... 24
- (1) 1号住居跡出土遺物 ..... 24
  - (2) 2号住居跡出土遺物 ..... 24
  - (3) 3号住居跡出土遺物 ..... 33
  - (4) 4号住居跡出土遺物 ..... 33
  - (5) B地区出土遺物 ..... 39

### 第3節 C地区の調査 ..... 41

1. 遺構 ..... 41

(1) 8号土壌	41
(2) 1号土器溜まり	41
(3) 2号土器溜まり	41
(4) 柱穴跡	41
2. 遺物	43
(1) 8号土壌出土遺物	43
(2) 1号土器溜まり出土遺物	43
(3) 2号土器溜まり出土遺物	43
(4) C地区出土遺物	49
第IV章 自然科学分析	52
第1節 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果と樹種同定	52
第V章 まとめ	56

## 挿 図 目 次

第1図 影平遺跡位置図	1
第2図 影平遺跡周辺地形図	7~8
第3図 影平遺跡基本土層図	6
第4図 調査区設定及び遺構分布図	9~10
第5図 遺物出土分布図	11~12
第6図 A地区遺構平面図	14
第7図 1号~6号土壌実測図	15
第8図 A地区出土遺物	17
第9図 B地区遺構平面図	18
第10図 1号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図	21
第11図 1号住居跡遺構実測図	22
第12図 1号住居跡出土遺物	23
第13図 2号住居跡遺物出土状況実測図	26~27
第14図 2号住居跡遺構実測図及び土層断面図	28
第15図 2号住居跡出土遺物(その1)	29
第16図 2号住居跡出土遺物(その2)	30
第17図 3号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図	31
第18図 3号住居跡遺構実測図	32
第19図 3号住居跡出土遺物	34
第20図 4号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図	35
第21図 4号住居跡遺構実測図	36
第22図 4号住居跡出土遺物	37
第23図 7号土壌遺物出土状況及び遺構実測図	38
第24図 B地区出土遺物	40
第25図 C地区遺構平面図	42
第26図 8号土壌遺物出土状況及び遺構実測図	44
第27図 8号土壌土層断面及び出土遺物	45
第28図 1号土器溜まり遺物出土状況実測図及び出土遺物	46
第29図 2号土器溜まり遺物出土状況実測図及び出土遺物	47

第30図	柱穴跡遺構平面図	48
第31図	C地区出土遺物実測図(その1)	50
第32図	C地区出土遺物実測図(その2)	51

## 表 目 次

第1表	遺跡番号及び遺跡名対照表	2
第2表	弥生土器観察表(1)	58
第3表	弥生土器観察表(2)	59
第4表	弥生土器観察表(3)	60
第5表	弥生土器観察表(4)	61

## 図 版 目 次

図版1	第3次試掘時検出壺	6
図版2	B地区、C地区調査前状況	62
図版3	A地区全景	63
図版4	A地区遺構検出状況	64
図版5	A地区遺物検出状況	65
図版6	1号~6号上墳及びその土層断面	66
図版7	1号~6号土墳及びA地区出土遺物	67
図版8	B地区全景	68
図版9	B地区遺物検出状況	69
図版10	1号住居跡遺物出土状況	70
図版11	1号住居跡土層断面及び遺構検出状況	71
図版12	1号住居跡出土遺物	72
図版13	2号住居跡遺物出土状況(その1)	73
図版14	2号住居跡遺物出土状況(その2)	74
図版15	2号住居跡土層断面及び遺構検出状況	75
図版16	2号住居跡出土遺物(その1)	76
図版17	2号住居跡出土遺物(その2)	77
図版18	3号住居跡遺物出土状況	78
図版19	3号住居跡土層断面及び遺構検出状況	79
図版20	3号住居跡出土遺物	80
図版21	4号住居跡遺物出土状況	81
図版22	4号住居跡土層断面及び遺構検出状況	82
図版23	4号住居跡出土遺物	83
図版24	7号土墳遺物出土状況、土層断面	84
図版25	B地区出土遺物	85
図版26	C地区全景	86
図版27	8号土墳遺物出土状況、土層断面及び出土遺物	87
図版28	1号土器溜まり遺物出土状況及び出土遺物、2号土器溜まり遺物出土状況及び出土遺物	88
図版29	C地区出土遺物(その1)	89
図版30	C地区出土遺物(その2)	90
図版31	C地区出土遺物(その3)	91
図版32	作業風景、遺跡現地説明会	92

巻頭グラビア (一)



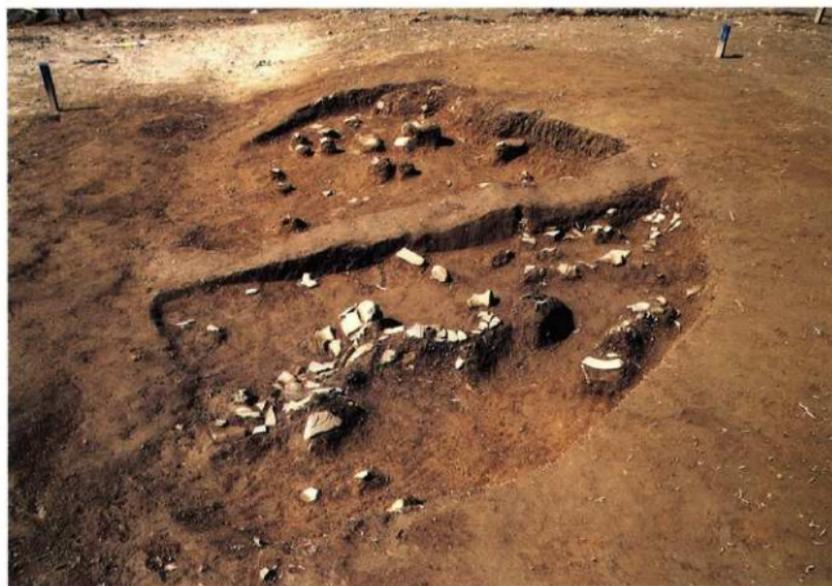
影平遺跡全景

巻頭クラヒア (二)



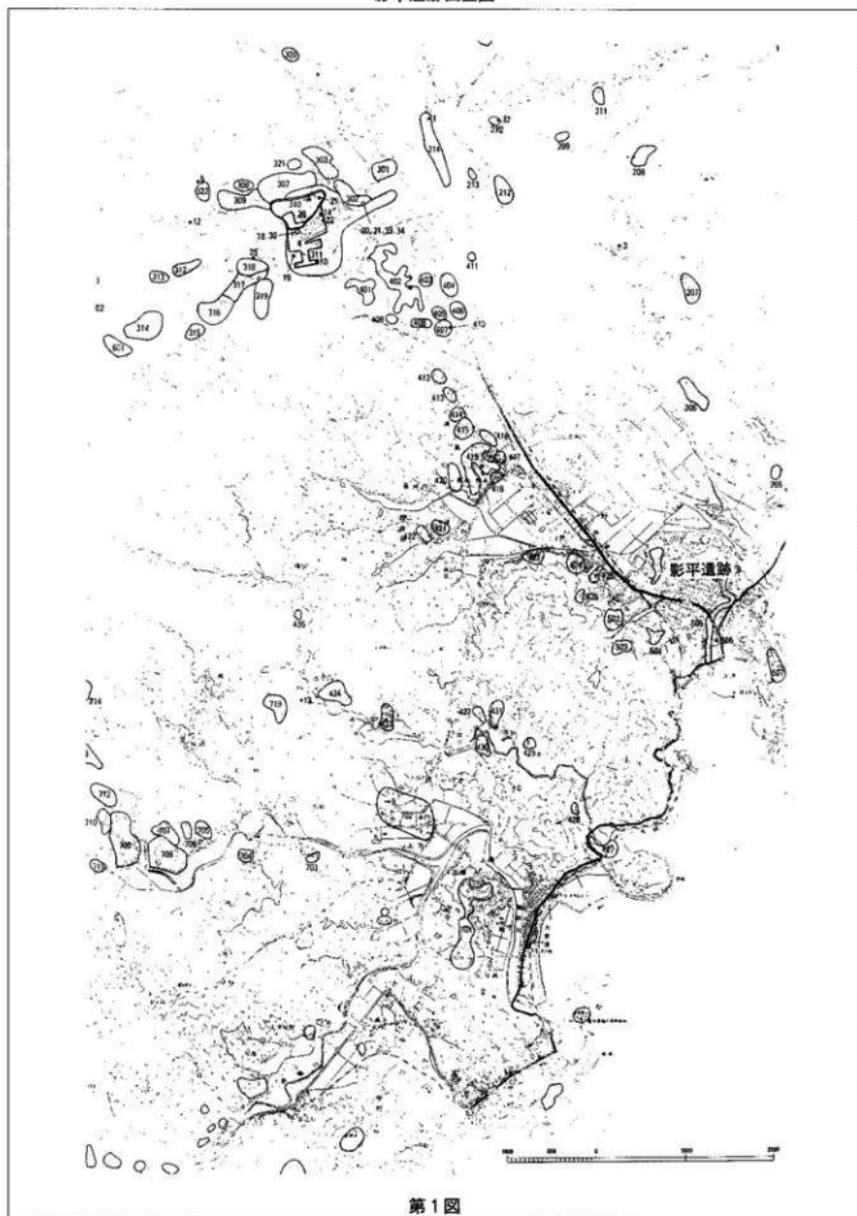
B地区住居跡

巻頭クラヒア (三)



2号住居跡遺物出土状況

影平遺跡位置圖



第1圖

第1表 遺跡番号及び遺跡名対照表

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
205	駒宮遺跡	日南市大字平山字別府	散布地	弥生～中世	416	野添遺跡	日南市大字戸高字野添	散布地	縄文～中世
206	高佐松跡	日南市大字益安字堀之内	城跡	中世	417	和田迫遺跡	日南市大字戸高字和田迫	散布地	弥生～中世
207	前無田遺跡	日南市大字東井分乙字前無	散布地	中世	418	横通遺跡	日南市大字戸高字横通	散布地	弥生～中世
208	鬼ヶ城跡	日南市大字字城ヶ平地	城跡	中世	419	縣城跡	日南市大字戸高字古城他	城跡	縄文～中世
209	沢渡遺跡	日南市大字松永字沢渡	散布地	中世	420	城之下遺跡	日南市大字戸高字城之下他	散布地	弥生～近世
210	陣ヶ追遺跡	日南市大字松永字陣ヶ追	散布地	中世	421	中浦ヶ追遺跡	日南市大字戸高字中浦ヶ追	散布地	縄文～中世
211	大ヶ城跡	日南市大字松永字大ヶ城	城跡	中世	422	黒須田遺跡	日南市大字戸高字黒須田	散布地	縄文～中世
212	殿所遺跡	日南市大字殿所字上ノ殿他	散布地	縄文～中世	423	上尾山遺跡	日南市大字戸高字上尾山	散布地	弥生～中世
213	岩ヶ尾遺跡	日南市大字殿所字岩ヶ尾	散布地	弥生～古墳	424	下尾山遺跡	日南市大字戸高字下尾山	散布地	縄文～近世
214	中ノ尾跡	日南市大字殿所字城ヶ平地	城跡	中世	425	大谷遺跡	日南市大字戸高字大谷	散布地	中世～近世
301	飛ヶ峯遺跡	日南市大字板敷字出水ヶ尾	散布地	古墳～中世	426	海田西遺跡	日南市大字戸高字海田西	散布地	弥生～近世
302	談義所遺跡	日南市大字今町字広木田	散布地	縄文～中世	428	岩山遺跡	日南市大字隈谷甲字岩山	散布地	近世
303	糺遺跡	日南市大字板敷数字中島田	散布地	平安～中世	429	平峯遺跡	日南市大字隈谷甲字平峯	散布地	縄文～近世
304	葛藤ヶ追遺跡	日南市大字板敷数字葛藤ヶ追	散布地	縄文～中世	430	上床遺跡	日南市大字隈谷甲字上床	散布地	縄文～近世
305	宮字ヶ追遺跡	日南市大字板敷数字宮字ヶ追	散布地	縄文～中世	431	峰ノ原遺跡	日南市大字隈谷甲字峰ノ原	散布地	弥生～中世
306	北ヶ追遺跡	日南市大字板敷数字北ヶ追	散布地	縄文～中世	432	六反田遺跡	日南市大字隈谷甲字六反田	散布地	縄文～中世
307	西山寺遺跡	日南市大字板敷数字西山寺	散布地	縄文～中世	433	川北三遺跡	日南市大字隈谷乙字川北三	散布地	縄文～近世
308	上ノ古遺跡	日南市大字吉野字楠木原	散布地	中世	434	川北一遺跡	日南市大字隈谷乙字川北一	散布地	弥生～平安
309	片平遺跡	日南市大字内野字片平	散布地	縄文～中世	435	平原遺跡	日南市大字隈谷丙字平原	散布地	縄文～中世
310	飯肥城跡	日南市大字楠原字舞鏡跡	城跡	中世～近世	501	影平遺跡	日南市大字平野字影平他	散布地	縄文～中世
311	飯肥城下町	日南市大字楠原字飯肥他	城下町	近世	502	否乎上遺跡	日南市大字平野字否乎原他	散布地	弥生～近世
312	鎌ヶ城遺跡	日南市大字吉野字鎌ヶ城	散布地	縄文～中世	503	山田上遺跡	日南市大字平野字山田上他	散布地	縄文～中世
313	上ノ原遺跡	日南市大字吉野字上ノ原	散布地	縄文～中世	504	沢津城跡	日南市大字平野字城ヶ平地	城跡	中世
314	川辺ヶ野遺跡	日南市大字吉野字川辺ヶ野	散布地	縄文～中世	505	堀川運河	日南市材木町他	運河	近世
315	八幡原遺跡	日南市大字楠原字八幡原	散布地	中世	506	汕洲山上古墳	日南市油津一丁目	古墳	古墳
316	原坂ノ上遺跡	日南市大字楠原字原坂ノ上	散布地	縄文～中世	507	古奥遺跡	日南市大字平野字袴ヶ浜	散布地	平安
317	湯跡ノ馬場遺跡	日南市大字楠原字湯跡ノ馬場	散布地	縄文～中世	601	酒谷上床遺跡	日南市大字酒谷乙字上床	散布地	不詳
318	上城跡	日南市大字楠原字上城	城跡	中世	701	南郷城跡	日南市大字下方字東平他	城跡	中世
319	大原道遺跡	日南市大字楠原字大原道	散布地	中世	702	内野原古墳群	日南市大字下方字飯屋西他	古墳群	古墳
320	寺ノ尾遺跡	日南市大字板敷数字寺ノ尾	散布地	弥生～中世	703	竹田遺跡	日南市大字上方字竹田	散布地	弥生～近世
321	長持寺庵寺跡	日南市大字板敷数字前田	寺院跡	中世	704	柿ノ木平遺跡	日南市大字萩之嶺字柿ノ木平	散布地	縄文～近世
322	大迫寺庵寺跡	日南市大字吉野字大迫寺	寺院跡	中世	705	石藪遺跡	日南市大字萩之嶺字石藪	散布地	縄文～中世
401	塚ノ尾跡	日南市大字早倉字栗原城	城跡	中世	706	富山堂免遺跡	日南市大字萩之嶺字富山堂免	散布地	縄文～中世
402	新山城跡	日南市大字早倉字木丸他	城跡	中世	707	馬込ヶ原遺跡	日南市大字萩之嶺字馬込ヶ原	散布地	縄文～中世
403	釈迦門遺跡	日南市大字屋倉字釈迦門	散布地	中世	708	宮ノ原遺跡	日南市大字萩之嶺字宮ノ原	散布地	縄文～中世
404	釈迦尾ヶ野遺跡	日南市大字屋倉字立久保	散布地	古墳～中世	709	東原遺跡	日南市大字萩之嶺字東原	散布地	縄文～近世
405	前田下遺跡	日南市大字屋倉字前田下	散布地	縄文～中世	710	上村遺跡	日南市大字萩之嶺字上村	散布地	縄文～近世
406	立久保遺跡	日南市大字屋倉字立久保	散布地	中世	711	数熊遺跡	日南市大字萩之嶺字数熊	散布地	縄文～中世
407	上講遺跡	日南市大字屋倉字上講	散布地	縄文～中世	712	西ノ原遺跡	日南市大字萩之嶺字西ノ原	散布地	弥生～近世
408	射場遺跡	日南市大字屋倉字南原	散布地	中世	713	東遺跡	日南市大字塚田乙字東	散布地	弥生～近世
409	時任遺跡	日南市大字屋倉字石ヶ嶺	散布地	中世	101	高寺城跡	北郷町大字入藤字内の田	城館跡	中世
410	下溝古墳	日南市大字屋倉字石ヶ嶺	古墳	古墳	102	田中遺跡	北郷町大字大藤字田中	城館跡	縄文～中世
411	川向遺跡	日南市大字早倉字上沙浦	散布地	中世	103	堀之内遺跡	日南市大字大藤字堀之内	城館跡	縄文
412	下山瀬遺跡	日南市大字早倉字下山瀬	散布地	弥生～中世	104	宮園遺跡	北郷町大字大藤字宮園	城館跡	縄文
413	境ヶ谷北遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世	105	尾崎遺跡	北郷町大字大藤字尾崎	城館跡	縄文
414	境ヶ谷遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	弥生～近世	106	山渡遺跡	北郷町大字大藤字山渡	城館跡	不詳
415	境ヶ谷南遺跡	日南市大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世～近世					

## 第I章 はじめに

### 第1節 調査に至る経過

日南市においては、県立日南病院の老朽化により建て替えによる病院の機能拡大が市民の悲願となっていた。そうした中ようやく着工の目途がつき平成2年度から建設予定地の造成が始まった。平成7年度からは、本体工事に着工し、南那珂地域の中核病院として期待されている。また、一方で建設に伴うインフラ整備事業も必要となり、その一環として産業道路からのアクセス道路として都市計画道路岡田～平野線が整備されることとなった。

こうした状況の中、道路および道路の法面として削平される部分が周知の埋蔵文化財包蔵地「影平遺跡」にあたるので、当教育委員会と日南市都市建設課が協議を行い、段階的に3回の試掘調査を実施した。1回目と2回目の試掘調査は、道路部分として開発予定の範囲について実施した。その結果、遺物、遺構とも確認されなかった。3回目の試掘調査では、道路の法面として削平が予定されるおよそ7,000㎡の丘陵地について、確認調査を実施し、約15ヶ所のトレンチから遺物を検出することができた。都市建設課との協議の結果、道路建設の為、丘陵上の遺跡を保存することは、困難であることから、日南市教育委員会を主体とした記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は畑地、竹林及び杉林であったため、調査に先立って竹林の伐採と杉の伐採に日数を要した。実質的な調査は、平成7年6月から平成7年11月までの間に実施された。

## 第II章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の環境

#### 1. 地理的環境

影平遺跡の所在する日南市は、宮崎県の南部に位置する。東側を、太平洋は日向灘に面し、南は南那珂郡南郷町と串間市に接し、西に都城市と北諸県郡三股町と接する。また北側は、宮崎市に接する。日南市は、市域の面積の大半を山地が占める。これらの山地をぬって広渡川、酒谷川、細田川などが日向灘に向かって東流している。このうち県南では最大の河川である広渡川は、その水系である酒谷川と合流して、細長い平野を形成している。日南市の海岸部では、日南層群が露頭しており、一方飢肥地区以西や以南の台地は大半がシラスにより形成されている。影平遺跡は、広渡川河口から西へ約1.2km入り込んだ標高約40メートルの独立丘陵上に広がる遺跡である。丘陵上から東へは、日向灘を一望でき、丘陵の北側には、広渡川水系の妻手川が流れる。丘陵は、おおむね南向きに広がる。日南市役所からは、南東方向に位置し、直線距離で約1.5kmを測る。遺跡の西側にはJR日南線が走る。

#### 2. 歴史的環境

日南市内の遺跡分布調査によれば、確認されている遺跡は、山間部をぬって流れる広渡川、酒谷川、細田川などの河川沿いに形成された狭い平野部に隣接する形で存在するシラス台地上に多く分布するようである。また、国の伝統的建造物群保存地区に選定されている飢肥地区は、その城下町全域を遺跡(311)として周知している。鶴戸地区やリゾート施設の並ぶ宮浦地区などの日南海岸沿いにも、丘陵上や微高地において縄文時代などの遺跡の分布が確認される。

旧石器時代については、これまで遺跡は確認されていない。

縄文時代については、市域において約60ヶ所の遺跡が確認されている。特徴としては、早期と後期の遺跡が多いことである。早期の遺跡としては、これまで5遺跡が調査されている。なかでも早期の竪穴式住居跡12軒と集石遺構19基が検出された坂ノ上遺跡(717)は、県内でも最人級の集落遺跡

である。一方、後期の遺跡としては市来式土器を中心にした後期縄文土器を多量に出土した上講遺跡(407)がある。上講遺跡では、このほか土製円盤や磨石なども出土している。これらの遺跡の他、殿所遺跡(212)や川北三遺跡(433)などがある。

弥生時代については、これまで16ヶ所の遺跡が確認されている。これまで弥生時代の遺跡の調査では、飫肥城下町遺跡や上講遺跡などで、土器などは出土していたものの住居跡などの遺構は、確認されていなかった。現在までのところ日南市内の弥生時代の遺跡は、段丘上や山裾の丘陵地などに限られており、低地での遺跡は、平成7年度に九州電力(株)日南営業所の新社屋建設に伴う試掘調査で、非常に状態の悪い土器片を数点採取できた所をのぞいては確認されていない。

弥生時代の遺構を伴う遺跡としては、今回報告の影平遺跡が、弥生時代中期の住居跡4軒や土壇8基を検出でき、遺物も中期の遺物を中心に瀬戸内系の土器、石皿、磨り石、磨製石鏃など多種多様に出土している。また、平成7年度に実施した、柿ノ木平遺跡では、弥生時代後期の住居跡を検出できており、日南市内の弥生時代の様相がようやく解明され始めてきたようである。

古墳時代に入ると市内には、県指定の細田古墳(702)と東郷古墳(008)の2基を含めた5基の古墳が存在する。油津港を見下ろす丘陵上に築かれた油津山上古墳は、日南市内では、最古の古墳と考えられていたが、現在は存在しない。古墳時代終末期の古墳としては、嵐田の海岸に近い砂丘上に立地し、現在は、国立療養所日南病院の敷地内に存在する狐塚古墳(203)がある。同古墳は、平成6年度に環境整備のための調査を行った結果、横穴式石室を主体とする古墳で、石室の規模は県内最大規模であることが判明した。また、出土した遺物も多種多様で水晶製勾玉や水晶製切子玉、馬具、装飾刀剣、耳環、青銅製腕、青銅製鈴、須恵器環、須恵器蓋環、ハソウ、須恵器高環、鉄鏃、管玉と畿内色を帯びたものが多い。一方、日南市域では、地下式横穴墓は、これまで確認されていない。また、集落遺跡も確認されていない。

奈良時代から平安時代までの遺跡は、飫肥城下町遺跡(311)の調査で、平安時代の集落が確認されている。また、狐塚古墳(203)では、石室内部を転用した形の平安時代の製塩遺構が確認できる。同古墳の内部からは、布日匠痕土器片が約3,000点ほど出土している。このほか、布日匠痕土器は、約16ヶ所の遺跡から採集されている。

鎌倉時代以降は、山城を中心とした中世城館の遺跡が中心となってくる。現在約13ヶ所の山城及び城館が確認されている。飫肥城跡(310)、酒谷城跡(611)、新山城跡(402)などが代表的なものとして上げられる。

近世に入ってからは、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている飫肥城下町遺跡(311)がある。飫肥城は、中世より薩摩藩島津氏と伊東氏が再三合戦を行い城主が入れ替わってきたが、伊東祐兵の入城以来は、300年間にわたり伊東氏により統治されてきた。飫肥地区には、長持寺跡(321)や大迫寺跡(322)などの寺院跡や大龍寺跡墓碑群、安国寺の墓碑群などがある。

## 第2節 遺跡の概要

### 1. 調査経過

調査は、都市計画道路園田～平野線の改良工事に伴いその道路法面として破壊される部分について実施した。調査は、平成7年6月から同年11月までの間で実施された。調査区は、その地形上の特徴から一番高い丘陵上の平地をA地区とし、A地区に隣接して比高差で3メートルから5メートル下がった丘陵上の平地との南側に広がる段々畑をB地区とした。またB地区から妻手川へ向かって広がる斜面をC地区とした。

A地区は、調査前は畑として利用されていた。試掘データによると耕作土が約30センチから40センチの厚さで堆積しており、その直下が遺物包含層となっているため耕作の際に包含層や遺構面の一部を破壊しているように考えられる。包含層は、約10センチから残りの良い部分で15センチほどしか残っていないかったが、調査では、耕作土を重機で剥いだ後、包含層（第Ⅱ層）上部から掘削作業を開始した。第Ⅱ層を掘り下げていく段階で出土した遺物は、分布図を作成した。第Ⅱ層中では、遺構等の検出は出来なかった。第Ⅲ層は硬い粘質土で、試掘のデータからは、遺物などは検出されなかったが、第Ⅲ層の上部を精査した結果、明るい褐色土に少くらしい褐色土が入り込む形で土壌を6基検出することができた。また、土壌掘り下げ面より下層は、岩盤となることを確認した。

B地区の調査は、A地区の遺構実測等と平行して行っていったが、調査前の状況が竹林と雑木林となっていたので、竹等の伐採と立木の処理を行ってから入っていった。B地区全体としては、畑及び果樹園として利用されていたようだが、長年耕作は行われておらず荒廃していた。

表土が剥ぎとれる状況になってから、B地区においては、試掘データから約60センチほどの耕作土の直下に包含層が広がることが確認されていたので、データに基づき重機によって表土を剥いでいった。また、果樹園として、利用されていた段々畑については、5段の畑からなりそれぞれの段について試掘データより包含層までの厚さが異なっていたので、それぞれのデータに基づき表土を剥いでいった。

B地区における出土遺物も分布図を作成した。B地区で検出できた遺構は、住居跡4軒と土壇1基であったが、2号住居跡を除いては、A地区と同様包含層中では、検出することが難しく第Ⅲ層の上部にてわずかな土色の違いと遺物の出土状況から判断して遺構の外周部を確認していった。2号住居跡については、包含層の約中程までを掘削した状態で非常に多量の土器を出土したので、比較的容易に遺構を確認出来た。B地区の住居跡を検出する頃には、A地区の調査は、ほぼ終了した。

C地区の調査は、B地区の住居跡の検出と平行する形で開始した。C地区は、A地区、B地区の丘陵上の平地と比べB地区から妻手川方向へ広がる傾斜地となっており、調査前状況では、雑木林と杉林となっていた。B地区の調査に平行して、立木の伐採を日南市森林組合へ依頼し、その後表土の掘削に入った。C地区については、試掘データが若干不足していたが、A地区、B地区のデータを基にして耕作土直下の包含層上面までを重機により掘削していった。

C地区についても出土遺物は、分布図を作成し、遺構の検出を行った。C地区は、その大半が傾斜地となるためか土壇が1基と土器溜まりを2基を検出したのみで、妻手川よりの最低部の平地では、柱穴跡を検出できた。

## 【参考文献】

- (1) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第1集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』  
日南市教育委員会 1990年3月
- (2) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第2集 日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』  
日南市教育委員会 1993年3月
- (3) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第3集 鉄肥城跡』日南市教育委員会 1994年3月
- (4) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第4集 日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会 1995年3月
- (5) 『日南市埋蔵文化財調査報告書 第5集 上講遺跡』日南市教育委員会 1995年3月

## 2. 遺跡の概要

### (1) 基本層序

影平遺跡は、岩石丘陵上に形成される遺跡である。調査地の全体的な堆積状況は、A地区は、耕作土（第I層）、包含層（第II層）とも薄く、両方あわせても、約40センチ～50センチ程である。B地区は、今回の調査地の中では丘陵上でも比較的平坦面が多いせいもあってか、第I層で30センチ～40センチあり、また包含層（第II層）でも同じ位の厚さを測る。C地区では、かなりきつい傾斜を持つ地形から耕作土ないしは流土に混じる形での遺物もみられたが、基本的には、A地区、B地区同様薄い耕作土の直下に包含層を含む。

I層：耕作土 7.5 YR 4/6 褐色

II層：遺物包含層 少し粘質性がある。 7.5 YR 5/6 明褐色

III層：硬い粘質土 7.5 YR 4/3 褐色

IV層：岩石層 灰褐色

### (2) 調査区設定及び遺構

調査地は、その地形の特徴から3地区に分けた。A地区は、遺跡の丘陵上でも最も高い位置に位置する平坦地で、東には太平洋を遠望出来る。B地区は、A地区に隣接して3～5メートルほど下がった部分に広がる平坦地と西に隣接する段々畑である。C地区は南北に広がる遺跡の北側に広がる傾斜地でその先には妻手川が流れる。A地区では、弥生時代の土壌と思われるものが6基確認できた。B地区では、日南市域では、初めて弥生時代の住居跡を4軒と土壌を1基検出できた。南那珂地域でも弥生時代の集落遺跡を検出できたのは、初めてである。C地区では、土壌を1基と土器溜まりが2基、それと柱穴跡を検出できた。柱穴跡について特に建物跡として並ぶものはなかった。

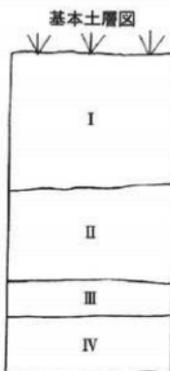
### (3) 遺物

#### ア) 土器

出土遺物については、弥生土器を多量に出土した。それぞれの地区毎に特徴ある出土状況を得ることができた。A地区においては、試掘時には、図版1に示したようにほぼ完形に近い壺を出土したことを考えると非常に薄い出土状態となった。また、土壌が6基検出できたがそれに伴う遺物は、非常に少なく6基全てを弥生時代のものとするには、検出資料があまりに少ないように思える。B地区については、出土した遺物の殆どが4軒の住居跡に伴うもので、B地区全体の8割ほどをしめる。C地区については、土壌が1基と土器溜まりが検出されたが、C地区全体の遺物量からすると斜面上の包含層より検出された遺物が約半分以上をしめる。これは、B地区あるいは、他の地域からの流土に混じって流れてきている遺物があるからではないかと思われる。また、B地区とC地区では、その遺物の特徴から時代差ないしは文化的な差、あるいは、集落の違い等が考えられる。

#### イ) 石器

出土した石器には、4号住居跡から出土した磨製石鎌や各住居跡から検出された石皿などがあり、その他にも磨石や砥石、打製石鎌等も出土している。



第3図

図版1 第3次試掘時検出壺

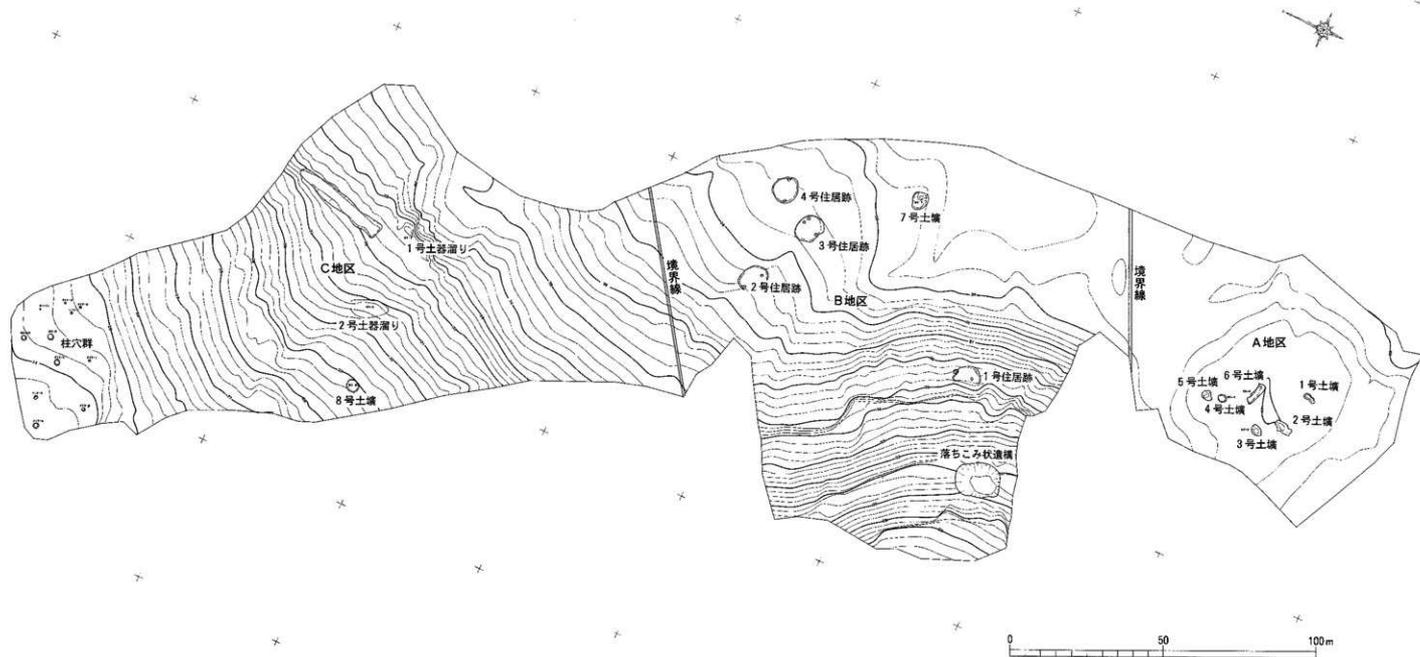


影平道跡周辺地形図



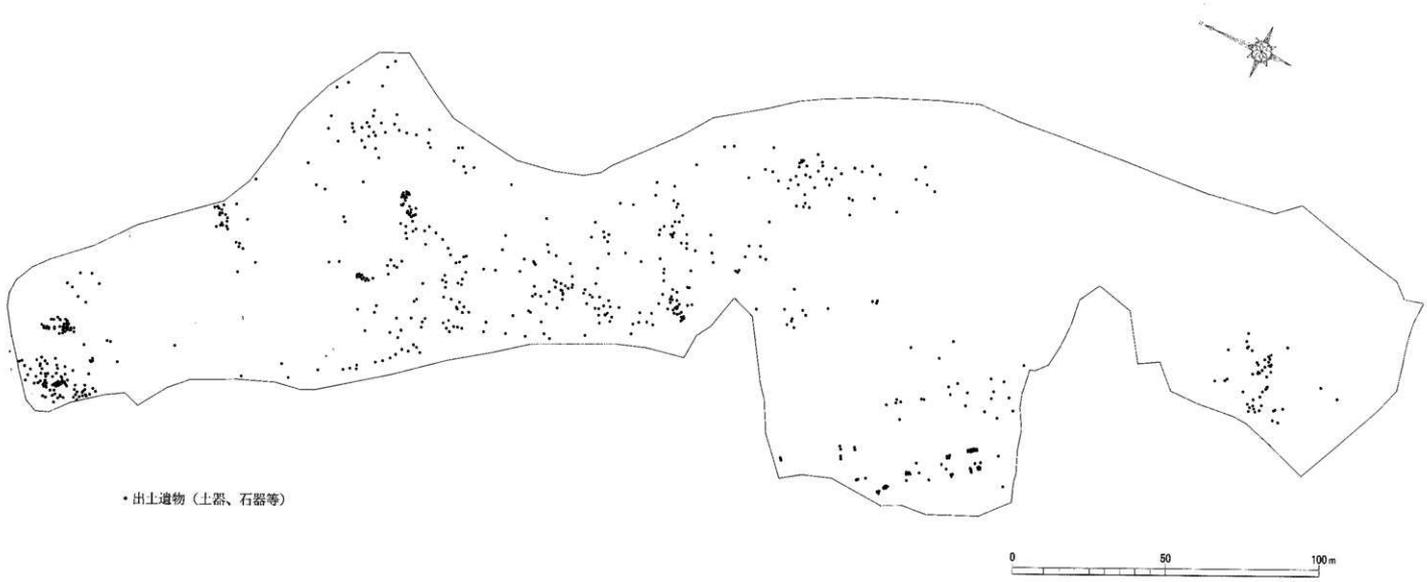
第2図

調査区設定及び遺構分布図



第4図

遺物出土分布図



第 5 図

### 第三章 調査

#### 第1節 A地区の調査

##### 1. 遺構

A地区では、全部で6基の土壌が確認された。この内遺構内に遺物が確認されたのは、2号、3号、5号、6号の4基である。

1号土壌は、南北に細長く大きさは、南北方向へ1メートル60センチを測り、東西方向へ70センチを測る。最深部でも、10センチ程で、全体的に浅い土壌である。埋土の堆積状況は、2層からなり、第I層は、7.5 YR 6/8の橙色で、粘質のある土である。また第II層は、7.5 YR 7/8の黄橙色でやはり粘質土である。

2号土壌は、2段の掘込みを持つ楕円形の土壌で、1号土壌と同じく南北方向へ広がる。大きさは、南北方向へ2メートル45センチを測り、東西方向へ最長幅で、1メートル13センチを測る。深さは、第一段目までが、20センチを測り、最深部の2段目で33センチとなる。埋土は、3層による堆積がみられ、第I層は、7.5 YR 7/8の黄橙色の粘質土、第II層は、10 YR 7/8の黄橙色で粘質土となり、第III層では、10 YR 4/6の褐色粘質土となる。

3号土壌は、比較的北東方向へ広がる楕円形の形で、大きさは、北東方向へ1メートル55センチを測り、南東方向へ1メートル15センチを測る。中心部に北東方向へ50センチ、南東方向へ40センチの落ち込みをもち、最深部で30センチを測る。埋土は、2層による堆積がみられ、第I層は、7.5 YR 7/8の黄橙色の粘質土、また第II層は、7.5 YR 6/8の橙色で粘質土である。

4号土壌は、ほぼ正円のプランを持つ土壌で、大きさは、南北方向へ1メートル10センチを測り、東西方向へ1メートル5センチを測る。プランの上場ラインから5センチから10センチぐらい入り込んだラインで落ち込みを形成し、最深部では、16センチを測る。全体的に浅めの土壌である。埋土は、2層から形成され、第I層は10 YR 7/8の黄橙色の粘質土、第II層は、7.5 YR 4/6褐色の粘質土である。

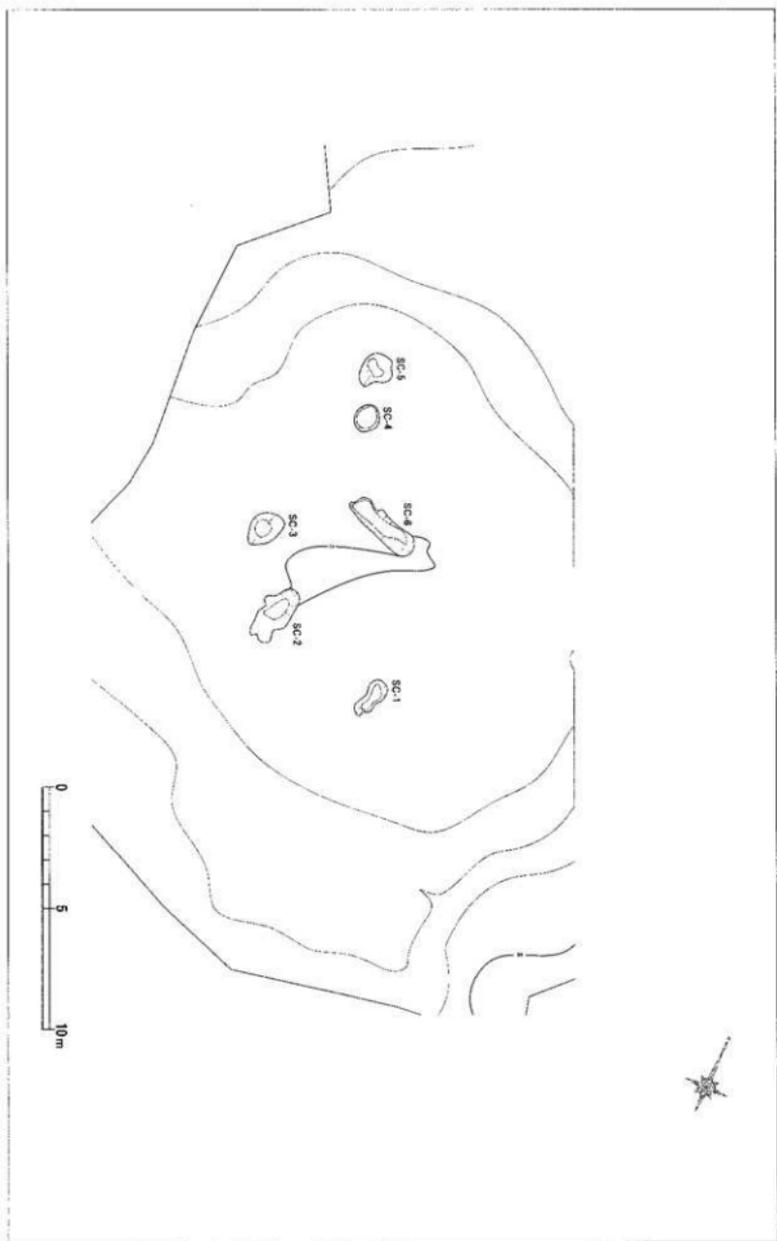
5号土壌は、北東側と南西側に若下の攪乱を受けており、攪乱部分を除いたプランを見たときは、南東方向へ少し広がる楕円形となる。攪乱部分を除いた大きさは、南東方向へ1メートル3センチを測り、北東方向へ92センチを測る。上場のラインより10センチ～15センチ程、入り込んだラインで平坦な落ち込みを形成し、最深部で50センチを測る。埋土の堆積は、4層により構成され、それぞれの層での堆積土は、粘質性のある土である。第I層は、10 YR 7/8の黄橙色。第II層は、7.5 YR 7/8の黄橙色を呈し、第III層では、7.5 YR 4/6の褐色となり、第IV層では、7.5 YR 7/8の明褐色を呈する。

6号土壌は、A地区のほぼ中心部に位置し、南東方向へ細長い楕円形をしている。大きさは、南東方向へ3メートル5センチを測り、北東方向へ最大幅で95センチを測る。最深部では、25センチを測るが、全体的には浅い土壌のイメージとなる。埋土の状態は、2層からなるが、その殆どを第I層が占める。第I層は、10 YR 7/8の黄橙色で粘質土である。第II層は、7.5 YR 4/6の褐色粘質土である。

A地区の6基の土壌は、いずれもA地区のほぼ中央部分に位置しており、標高40メートルから39メートルのほぼ平坦な部分に検出できた。試掘のデータによると表土(耕作土)から遺物包含層までは、比較的浅く元来の土壌の掘込み部分が破壊されている可能性が高い。

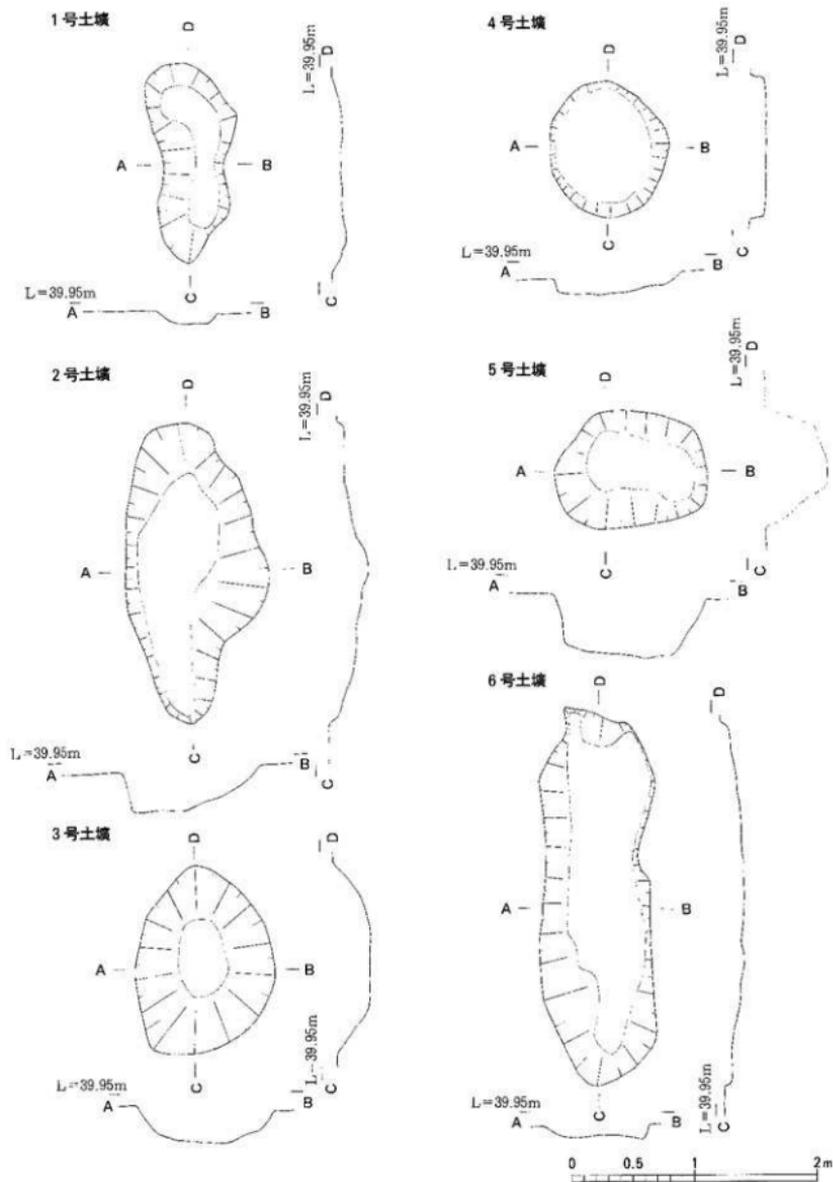
また、遺構の検出は、第II層の上層部あるいは、第II層中では難しく、第III層の上部において明るい褐色土に入る少し暗めの褐色の土色の違いで検出に努めた。

A地区遺構平面図



第6図

1号~6号土坑实测图



第7图

## 2. 遺物

### (1) 土器

- 1 は、甕の口縁部で、口縁部先端に沈線を一条巡らす。
- 2 は、壺の胴部で、三角突帯を三条巡らす。
- 3 は、壺の口縁部で、口縁部先端が肥厚する。
- 9 は、壺の完形品で、第3次試掘の際に出土したものである。叉状口縁を持ち、口径で13.1センチを測り、胴部最大径で、24.6センチを測る。

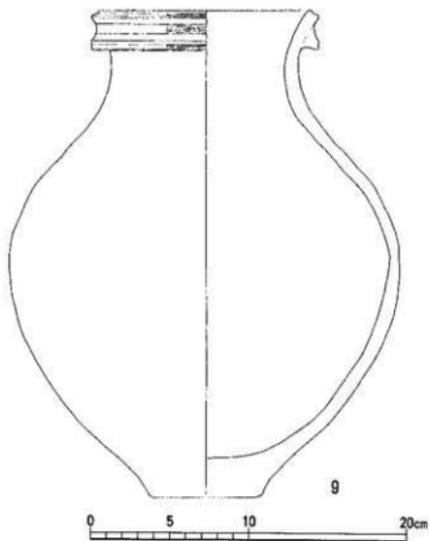
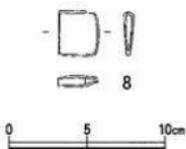
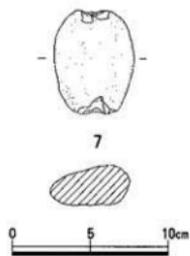
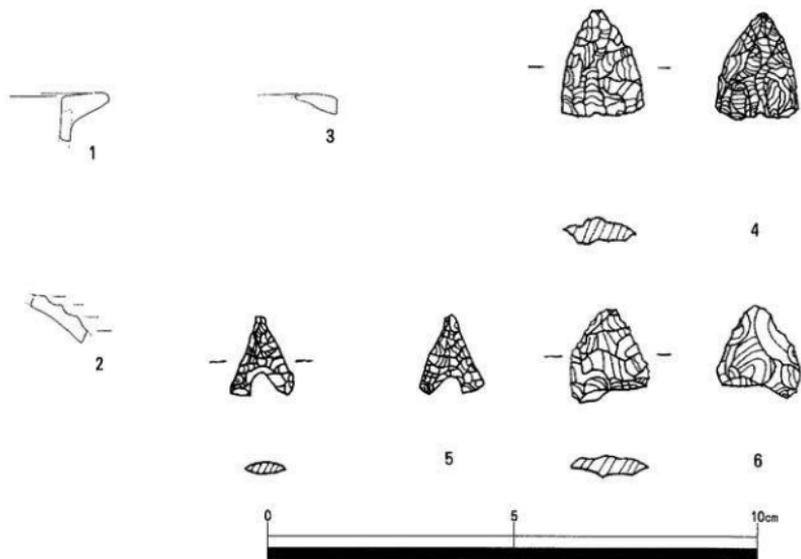
### (2) 石器

- 4 は、黒曜石の打製石鏃である。法量は、長さ2.2センチで、最大幅1.4センチを測る。
- 5 は、黒曜石の打製石鏃で基部が凹状の三角形の石鏃である。法量は、長さ1.6センチで最大幅が1.3センチを測る。
- 6 は、石鏃未完成品で、石材は、チャートである。法量は、長さ2.0センチで、最大幅は1.5センチを測る。
- 7 は、石錘で、両端に切り込みが入る。法量は、長さ6.6センチで、最大幅5.5センチを測り込む。石材は、不明である。

### (3) その他の遺物

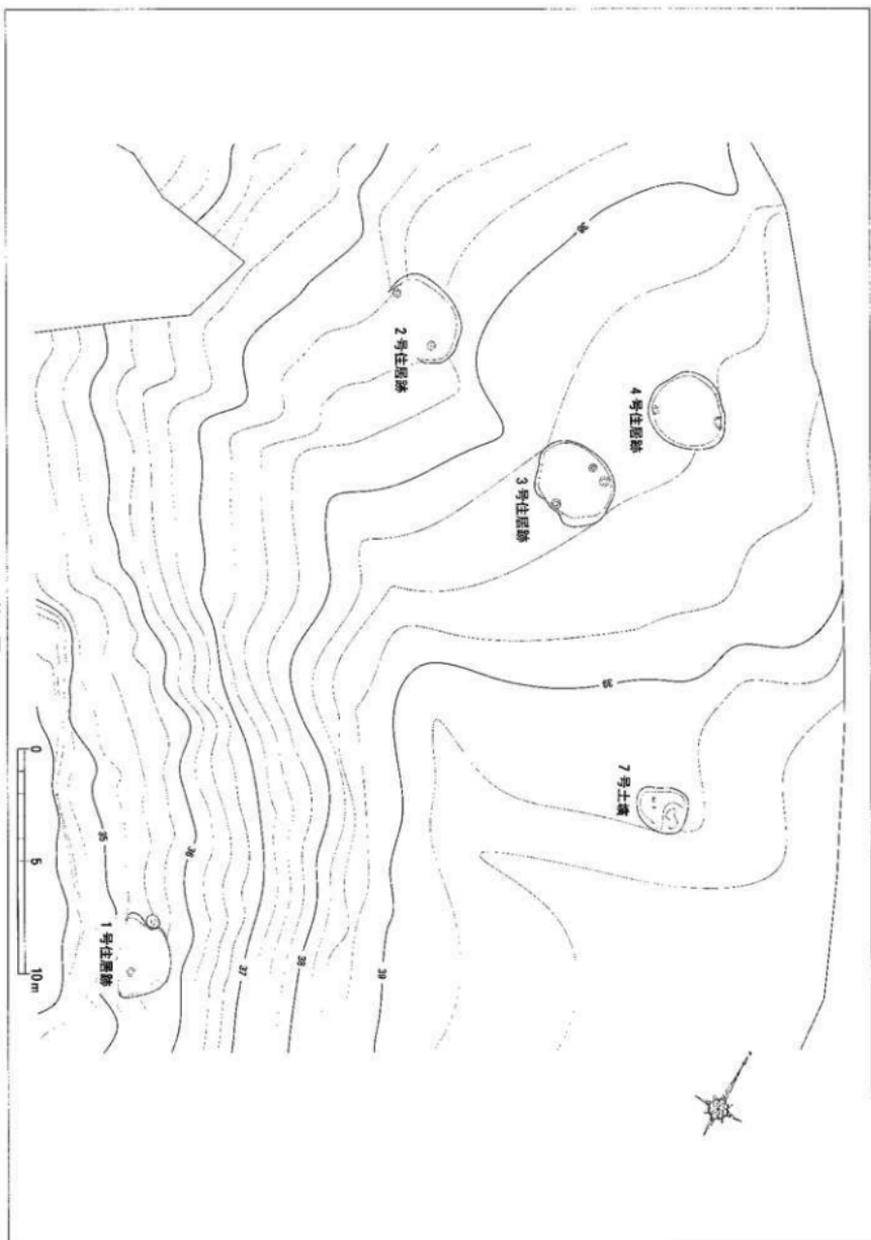
- 8 は、青銅製品の一部で、刀剣の一部分か装束の一部分と考えられる。大きさは、長さ2.8センチを測り、幅は2.6センチを測る。

A地区出土遺物



第8圖

日地区遺構平面図



第9図

## 第2節 B地区の調査

### 1. 遺構

#### (1) 1号住居跡

1号住居跡は、標高35メートルから36メートルのB地区段々畑の一段目において検出された。住居跡の西側約半分程は、段々畑の第2段目により破壊されていた。住居跡は、円形プランで残存している最大幅で南北方向へ3メートル60センチを測る。残存しているプランから推測すると最大幅3メートル60センチをこの円形プラン住居跡の直径とみても良いように思える。検出できた住居跡の堀込みは、上場と下場の比高差で最大50センチを測る。住居跡の柱穴としては、南側壁面から北方向へ70センチ程、測り込んだ位置に検出できた。直径約30センチの柱穴で、深さは15センチ程を測る。

住居跡の埋土は、南北の土層図と東西の上層図からみると第I層の下面が住居跡の底部となり、基本的には、住居跡内部の堆積状況は、一層である。第I層は、10YR 7/8の黄褐色で粘質土となり、10YR 7/6の明黄褐色のブロックが混在する。

1号住居跡は、他の3軒の住居跡が標高38メートル～39メートルの平坦地に集まって検出されたことに比べると1軒だけ離れて傾斜地に検出された。

#### (2) 2号住居跡

2号住居跡は、B地区内では北西よりの標高38メートル前後の平坦地で検出された住居跡である。この住居跡も1号住居と同様に南側約半分が破壊されていた。住居跡南側を南東方向から西北方向へ幅約70センチ程の溝が走っていた。地権者の方の話によると畑として利用していた頃に排水溝としてもうけたものらしい。そしてその排水溝を通す際に、2号住居跡の南側半分を破壊したらしい。2号住居跡は、プランの最大残存長で、4メートルを測る。現存するプランから推測すると、この数値をこの住居跡の直径としても良いようだ。残存している住居跡プランの上場と下場の比高差は、最大で約50センチ程あり、北東部の縁辺部から南方向へ比高差がほぼなくなる形で傾斜していく。住居跡内部の埋土堆積状態は、南北方向の土層断面からみると5層に分けられる。基本となる埋土は、第II層と第V層からなるものと推測され、第I層と第II層と第III層は、住居内部の何らかの影響によるものと思われる。住居跡内部では、柱穴跡が2ヶ所検出できた。一つは、南東壁面部分から約50センチ程測り込んだ位置に検出され、もう一つは、西北壁面に密着して検出された。このほかには、柱穴は検出されず西北方向から南東方向へ軸とした2本柱の竪穴式住居跡と考えられる。柱穴は、ともに直径約35センチで、深さは25センチと27センチを測る。

#### (3) 3号住居跡

3号住居跡は、B地区では東よりに位置し、すぐ北東隣には、4号住居跡が存在する。住居跡のプランは、北西方向を軸として、3メートル90センチを測り、これに直行する長さが3メートルを測る。全体的には、楕円形のプランとなる。3号住居跡は、全体のプランを検出することができた。上場と下場の比高差は、平均で25センチから深い部分でも30センチ程となる。住居跡内部の埋土の堆積状況は、3層からなり、第I層は、10YR 4/4の褐色で、第II層は、10YR 5/6の黄褐色上で粘質、第III層は、10YR 5/8の黄褐色土となり、3層中では一番硬い粘質土である。住居跡内で検出できた柱穴跡は、北東壁面に密着する位置と南西壁面に密着する位置でそれぞれ検出され、両柱穴を結ぶ北東方向から南西方向を軸とする2本柱の竪穴式住居跡とみることができる。それぞれの柱穴は、北東壁面よりの柱穴が直径約25センチで、深さ15センチを測る。また南西壁面の柱穴は、直径約

32センチで深さ20センチを測る。

住居跡底部を検出した後に、南西部分に住居跡の軸に沿って長さ1メートル50センチとそれに直行する形で約80センチの楕円形の掘込みが検出された。これは、最深部で約50センチを測るが、その上層部の埋土の堆積状況や掘込み内の埋土を見ると攪乱によるものではないかと思われる。

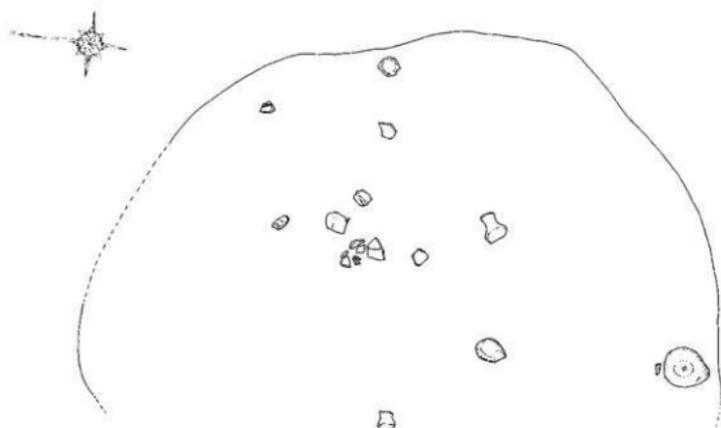
#### (4) 4号住居跡

4号住居跡は、B地区では最も北東部分に位置し、3号住居跡が南西に隣接する。3号住居跡と同様、標高約38メートルから39メートルの平坦地に検出された。4軒の住居跡の中では、1軒だけほぼ真円に近いプランを持つ形で検出できた。南北方向に3メートル30センチを測り、東西方向に3メートル20センチを測る。全体の円形プランの上場と下場の比高差でおおむね30センチから35センチを測り込む。住居跡内部の埋土の堆積状況は、2層からなり、第Ⅰ層は、10YR 4/2の灰黄褐色で、粒子の粗い粘質土である。また、第Ⅱ層は、10YR 5/8の黄褐色で第Ⅰ層よりは、粒子の細かい粘質土である。住居跡内部で検出された柱穴跡は、二つある。その一つ目は、ほぼ東側壁面に密着する形で検出された直径40センチ、深さ20センチを測るもので、もう一つは、西側壁面に密着する形で検出された直径30センチ、深さ17センチを測るものである。この二つを結ぶ東西方向を軸として二本柱の竪穴式住居跡が想定される。

#### (5) 7号土壌

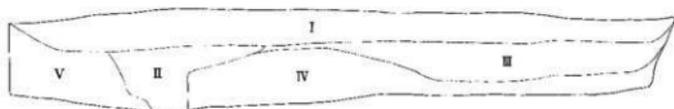
7号土壌は、二段の掘込みを持つ土壌で、南北方向に2メートル20センチを測り、東西方向に2メートルを測る。第二段目の掘込みは、7号土壌全体プランの中の東側に位置し、東西方向へ1メートル20センチを測り、南北方向に90センチを測る楕円形のプランとなる。埋土は、第一段目が3層からなり、第二段目の掘込みも3層からなる。7号土壌は、標高39メートルから40メートルの間のB地区の南東よりの平坦地に位置している。

1号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図



南北セクション

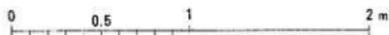
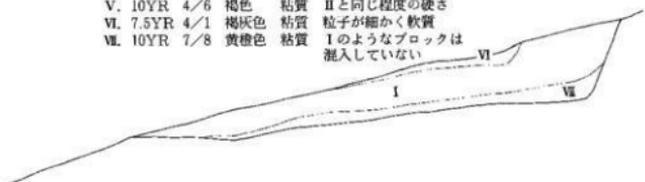
L<sub>1</sub>=35.89m



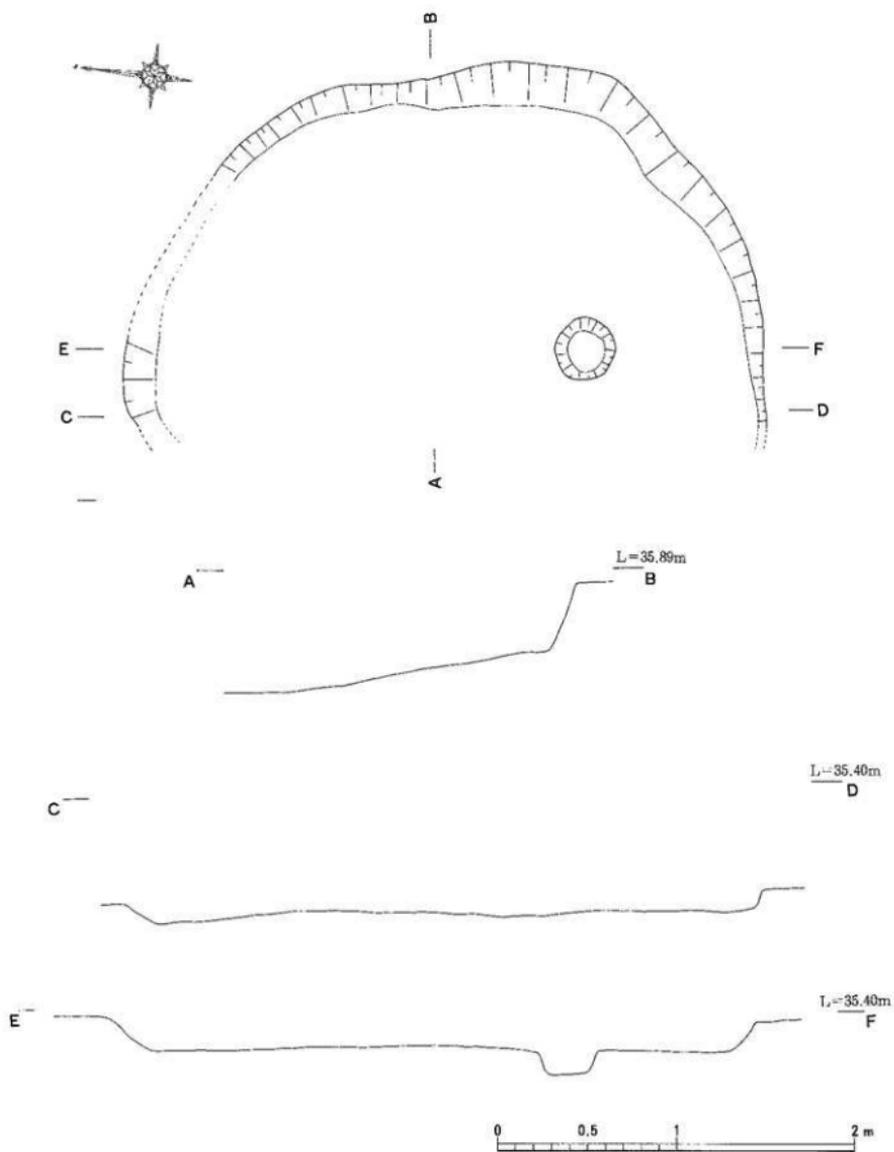
東西セクション

L<sub>2</sub>=35.89m

- |      |       |     |        |    |          |                   |
|------|-------|-----|--------|----|----------|-------------------|
| I.   | 10YR  | 7/8 | 黄橙色    | 粘質 | 10YR 7/6 | 明黄褐色のブロック混入       |
| II.  | 10YR  | 4/1 | 褐灰色    | 粘質 |          | Iより硬い             |
| III. | 10YR  | 5/4 | にぶい黄褐色 |    | 10YR 7/6 | 明黄褐色のブロック混入       |
| IV.  | 10YR  | 5/4 | にぶい黄褐色 |    |          | IIIのブロックは混入していない  |
| V.   | 10YR  | 4/6 | 褐色     | 粘質 |          | IIと同じ程度の硬さ        |
| VI.  | 7.5YR | 4/1 | 褐灰色    | 粘質 |          | 粒子が細かく軟質          |
| VII. | 10YR  | 7/8 | 黄橙色    | 粘質 |          | Iのようなブロックは混入していない |

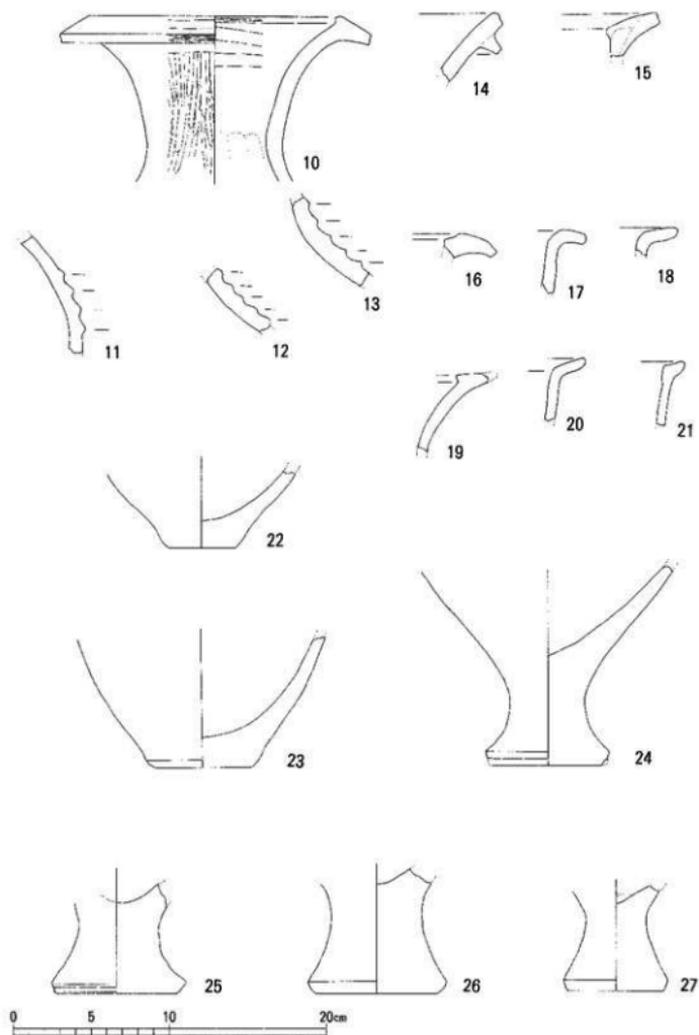


1号住居跡遺構実測図



第11図

1号住居跡出土遺物



第12圖

## 2. 遺物

### (1) 1号住居跡出土遺物

10は、壺の口縁部及び頸部で、口径は、16.0センチを測る。口縁部は、ほぼ水平に延び、頸部外面は、ミガキが顕著に伺える。

11は、壺の胴部で、三角突帯を4条巡らす。

12は、壺の肩部で、三角突帯を5条巡らす。

13は、壺の肩部で、三角突帯を54条巡らす。

14は、壺の口縁部で、叉状口縁を持つ。

15は、甕の口縁部で、口縁部先端に沈線を1条巡らす。

16は、壺の口縁部で、口縁部内側に突帯を1条巡らす。焼成は、極めて悪い。

17は、甕の口縁部で、口縁部先端は丸く調整され、色調は、鈍い乳白色を呈す。

18は、甕の口縁部で、口縁部先端は、丸く調整されている。

19は、壺の口縁部付近の破片で、口縁部が内側に張り出す。

20は、甕の口縁部で、口縁部先端は、丸く調整されている。

21は、甕の口縁部で、極めて小さい口縁部突帯を持つ。

22は、壺の底部で、底径は、4.7センチを測る。底部からは、約50度の立ち上がりとなる。

23は、壺の底部で、底径は、6.0センチを測り、底部からは、約54度の立ち上がりを持つ。

24は、甕の底部で、底径は、6.8センチを測り、焼成は悪い。脚部下に沈線を1条巡らす。

25は、甕の底部で、底径は、7.7センチを測り、焼成は悪い。脚部下に沈線を1条巡らす。

26は、甕の底部で、底径は、8.5センチを測り、焼成は極めて悪い。脚部下位は面取りを施す。

27は、甕の底部で、底径は、6.4センチを測り、脚部下位は、面取りのみ施す。

### (2) 2号住居跡出土遺物

28は、甕の口縁部から胴部で、口径が28.8センチを測る。口縁部先端に沈線を1条施し、胴部に三角突帯を4条巡らす。

29は、甕の口縁部で、口縁部先端に面取りの跡が見られる。

30は、甕の口縁部で、口縁部先端に沈線を1条巡らす。

31は、甕の口縁部で、口縁部先端に沈線を1条巡らす。

32は、甕の口縁部で、口縁部先端に沈線を1条巡らす。

33は、甕の口縁部から胴部で、口径が28.4センチを測る。口縁部先端に沈線を1条巡らし、胴部に三角突帯を4条巡らす。

34は、甕の口縁部から胴部で、口径が30.6センチを測る。口縁部先端に沈線を1条巡らし、胴部に三角突帯を3条巡らす。

35は、甕の口縁部から胴部の上位までで、口縁部先端に沈線を1条巡らし、三角突帯が1条残存している。

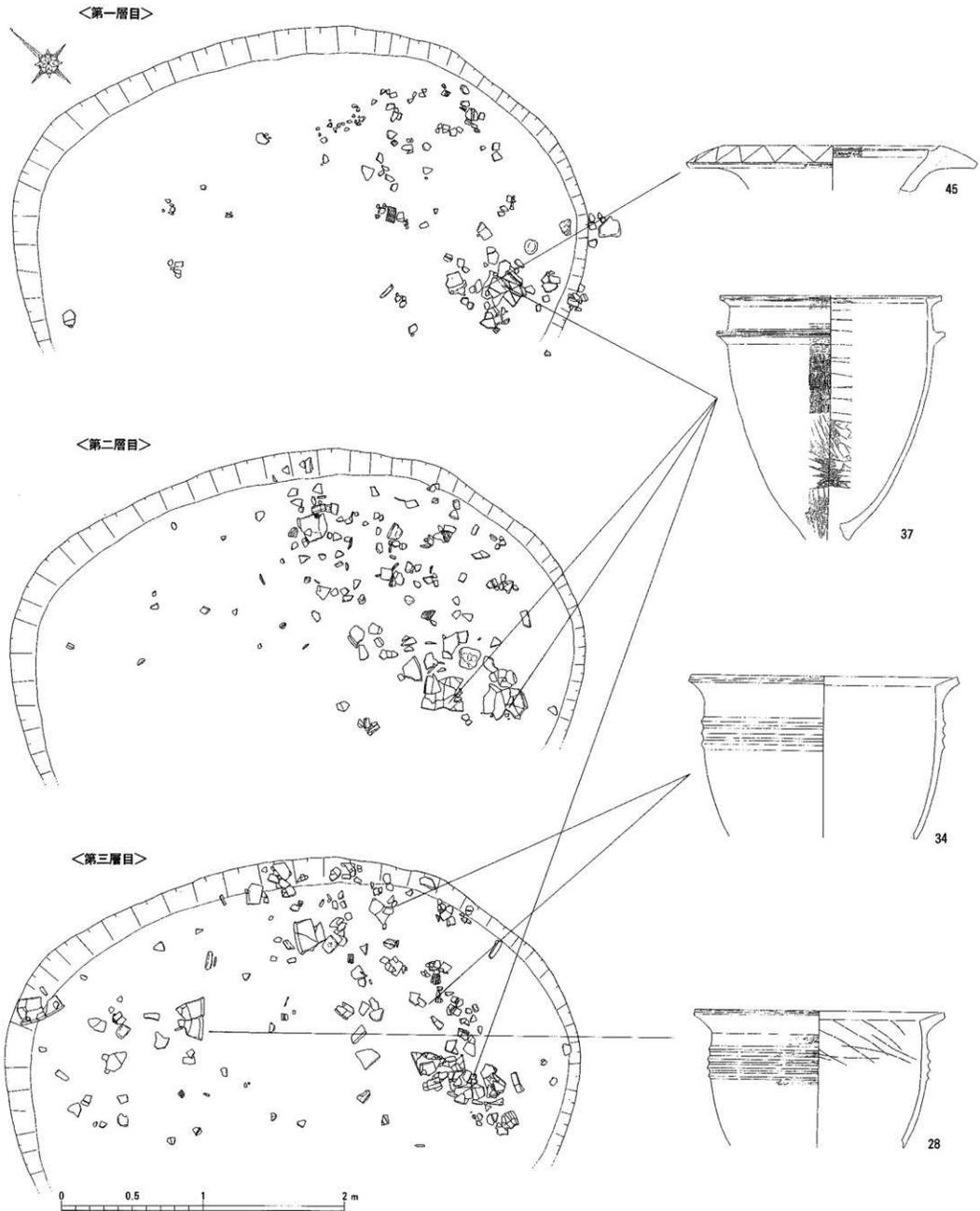
36は、甕の口縁部で、口縁部が内部に張り出す。

37は、大甕ではほぼ完形に近い。口径は、51.2センチを測り、高さは、57.0センチを測る。口縁部先端及び胴部突帯先端に1条の沈線を巡らす。胴部の突帯は、タガ条に巡らされる。

38は、壺の口縁部で、口縁部内側に三角突帯を1条巡らす。

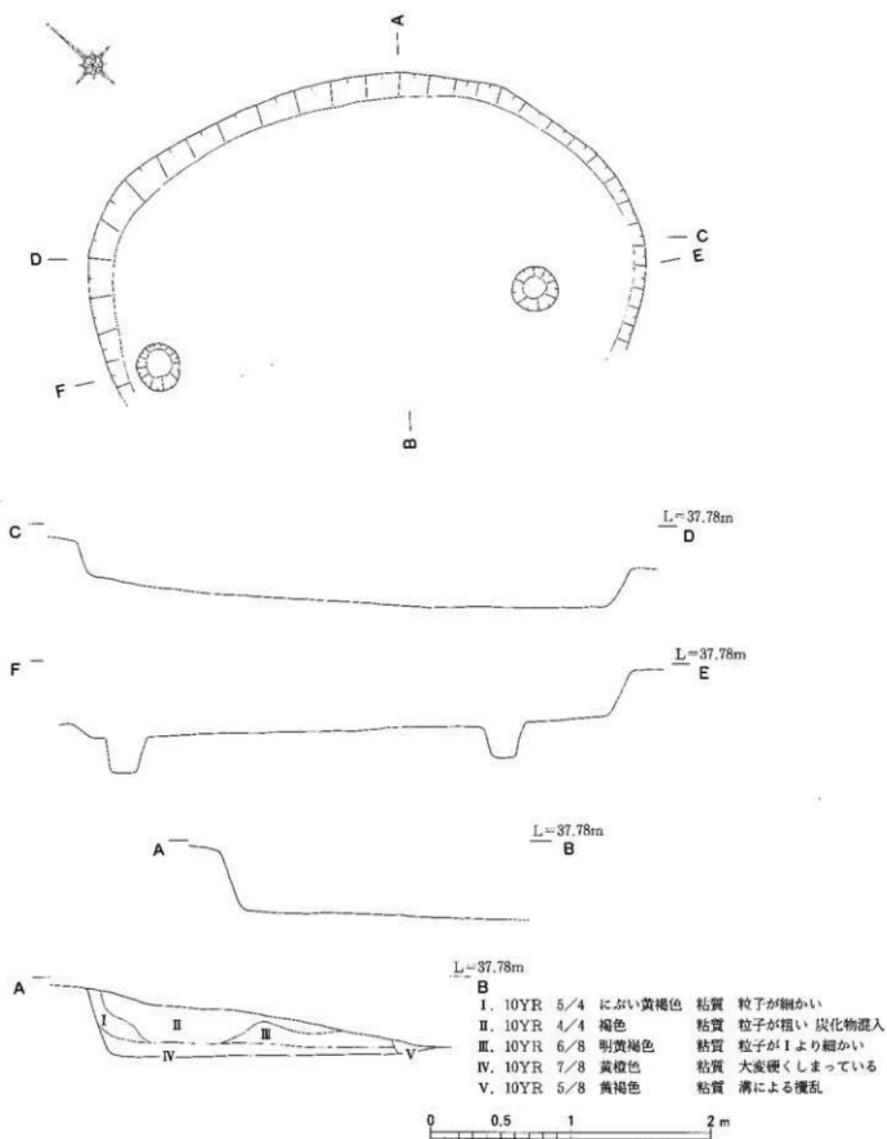
39は、壺の口縁部で、叉条口縁を持ち、全体的に丸みを帯びる。

- 40は、甕の口縁部から胴部で、口縁部先端が丸みを帯びる。色調は、鈍い乳白色を呈す。
- 41は、壺の肩部で、3条の三角突帯を巡らす。
- 42は、壺の肩部で、4条の三角突帯を巡らす。
- 43は、壺の肩部で、突帯先端部分に沈線を1条巡らす。
- 44は、壺の胴部で、5条の三角突帯を巡らす。
- 45は、壺の口縁部で、口縁部内側に三角突帯を1条巡らす。口縁部上面に鋸歯紋を施す。
- 46は、壺の口縁部で、又条口縁を持つ。
- 47は、甕の口縁部から胴部で、口縁部先端に丸みを帯びる。胴部にやや幅広の三角突帯を1条巡らす。色調は、淡黄褐色を呈す。
- 48は、甕の口縁部から胴部で、口縁部先端が丸みを帯びる。
- 49は、甕の底部で、底径が7.2センチを測り、脚部下位に沈線を1条施す。
- 50は、甕の底部で、底径が6.3センチを測り、脚部下位に幅広の沈線を1条施す。
- 51は、甕の底部で、底径が9.5センチを測り、やや上げ底ぎみで、小蹼を多く含む。



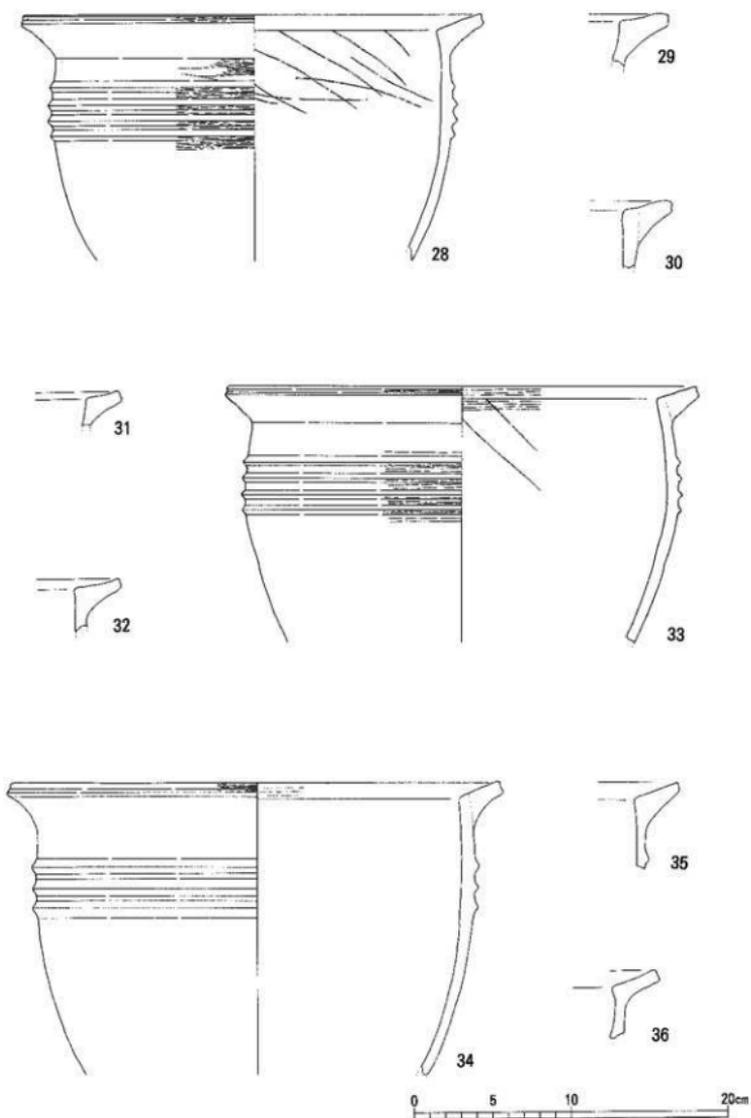
第13図

2号住居跡遺構実測図及び土層断面図



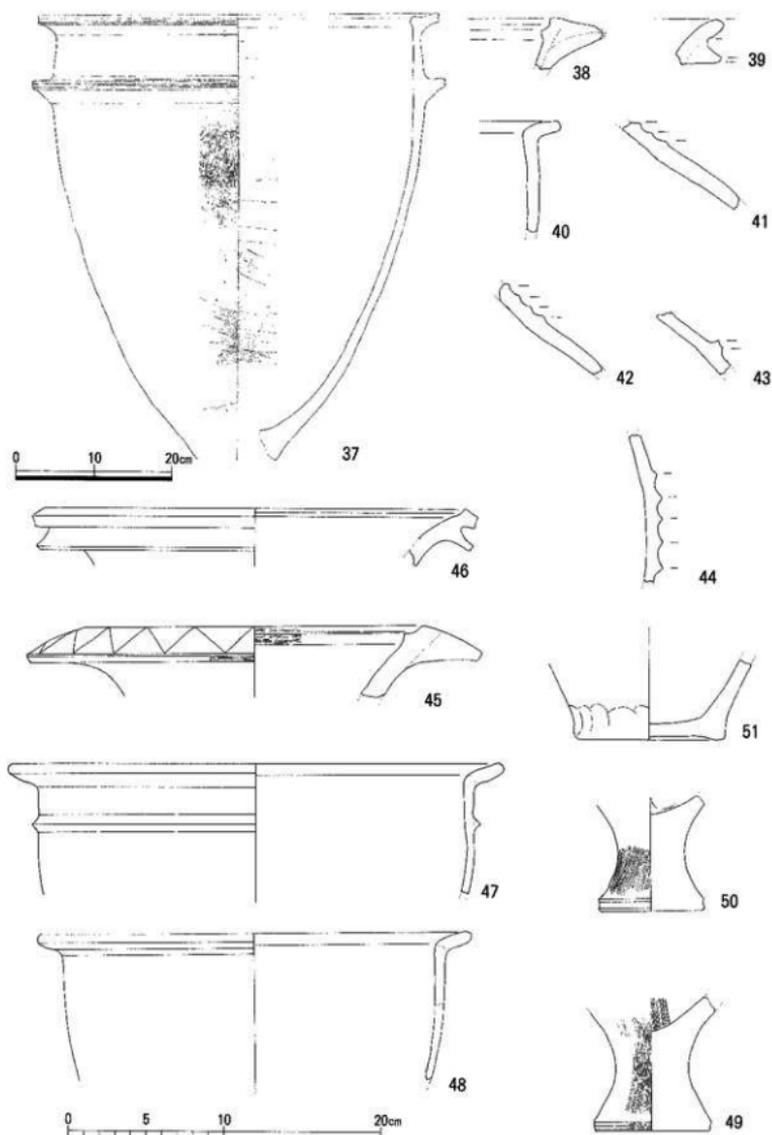
第14図

2号住居跡出土遺物（その1）



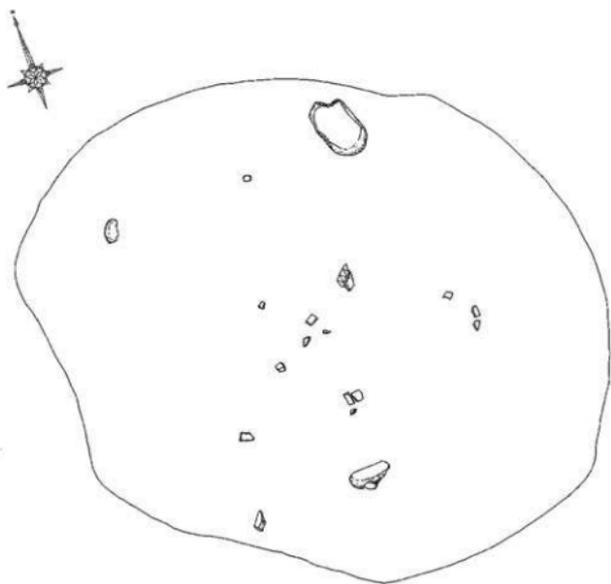
第15図

2号住居跡出土遺物（その2）



第16図

3号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図



南北セクション

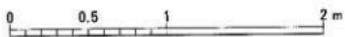
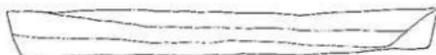
L=35.87m



- I. 10YR 4/4 褐色 3層中では一番粘質が弱い  
 II. 10YR 5/6 黄褐色 III層より弱い粘質土  
 III. 10YR 5/8 黄褐色 粘質土で3層中で一番硬い

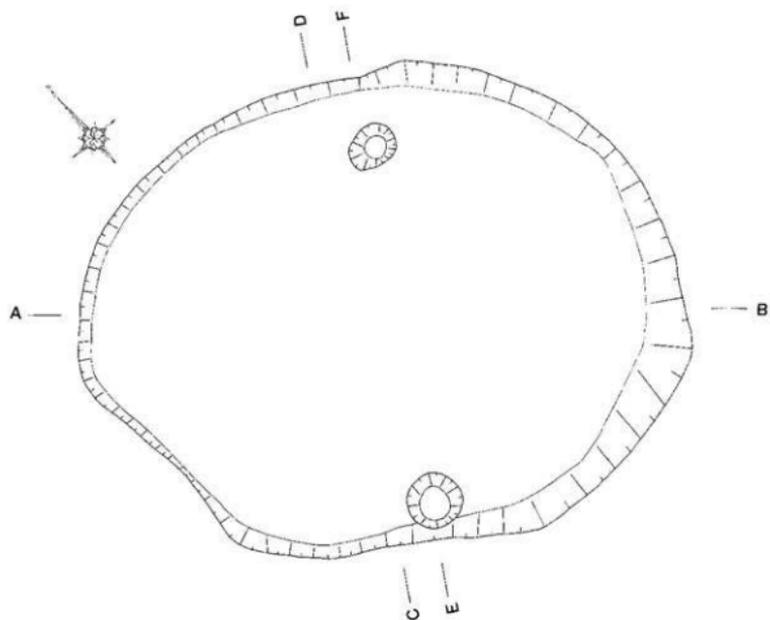
東西セクション

L=35.87m



第17図

3号住居跡遺構実測図



第18図

### (3) 3号住居跡出土遺物

52は、壺の口縁部で、口径は、27.3センチを測り、口縁部内側に三角突帯を1条巡らす。口縁部上面には、鋸歯紋を施す。

53は、壺の口縁部で、口径は、26.8センチを測り、口縁部先端に沈線を1条施す。外面の全体的な色調は、淡黄褐色を呈す。

54は、壺の口縁部で、口径は、35.4センチを測る。口縁部先端に沈線を1条施す。

55は、壺の口縁部で、口縁部先端に沈線を1条施す。

56は、壺の口縁部で、口縁部先端に面取りの痕跡を残す。

57は、壺の口縁部で、口縁部内側はやや張り出す。口縁部先端に面取りの痕跡を残す。

58は、壺の口縁部で、口縁部先端に面取りの痕跡を残す。

59は、壺の口縁部で、口縁部先端がやや肥厚ぎみとなる。外面色調が鈍い黄白色を呈す。

60は、壺の口縁部で、口縁部先端がやや肥厚ぎみとなる。外面色調が鈍い黄白色を呈す。

61は、壺の口縁部で、口縁部全体の厚さは、均一である。

62は、壺の口縁部で、口縁部全体の厚さは、均一である。口縁部先端に沈線を1条巡らす。

63は、壺の口縁部で、口縁部先端が丸みを帯びる。胎土に小礫を含む。

64は、壺の口縁部で、口縁部先端の下部がやや張り出す。

65は、胴部の破片で、幅広の突帯先端に沈線を1条巡らす。

66は、壺の底部で、底径は、5.9センチを測る。調整が悪く、色調は、明赤褐色を呈す。

### (4) 4号住居跡出土遺物

67は、壺の完形品で、口径は、34.2センチを測り、器高は、29.0センチを測る。また、底径は9.5センチを測る。口縁部先端に沈線を1条施し、口縁部上面には、8本単位のヘラによる直線紋を5方向に施していたようである。胴部は、やや張り気味で最大径は、突帯の下位で31.8センチを測る。また胴部には、三角突帯が4条巡らされ、底部は、平底ではあるが中心部がやや上がり気味である。外面色調は、鈍い灰黄褐色を呈す。胴部下半には、粗いハケ目調整がみられる。

68は、壺の口縁部で、口径は、27.9センチを測る。口縁部上面に直径1.8センチの1個単位の円形浮紋を施す。外面色調は、明赤褐色を呈す。

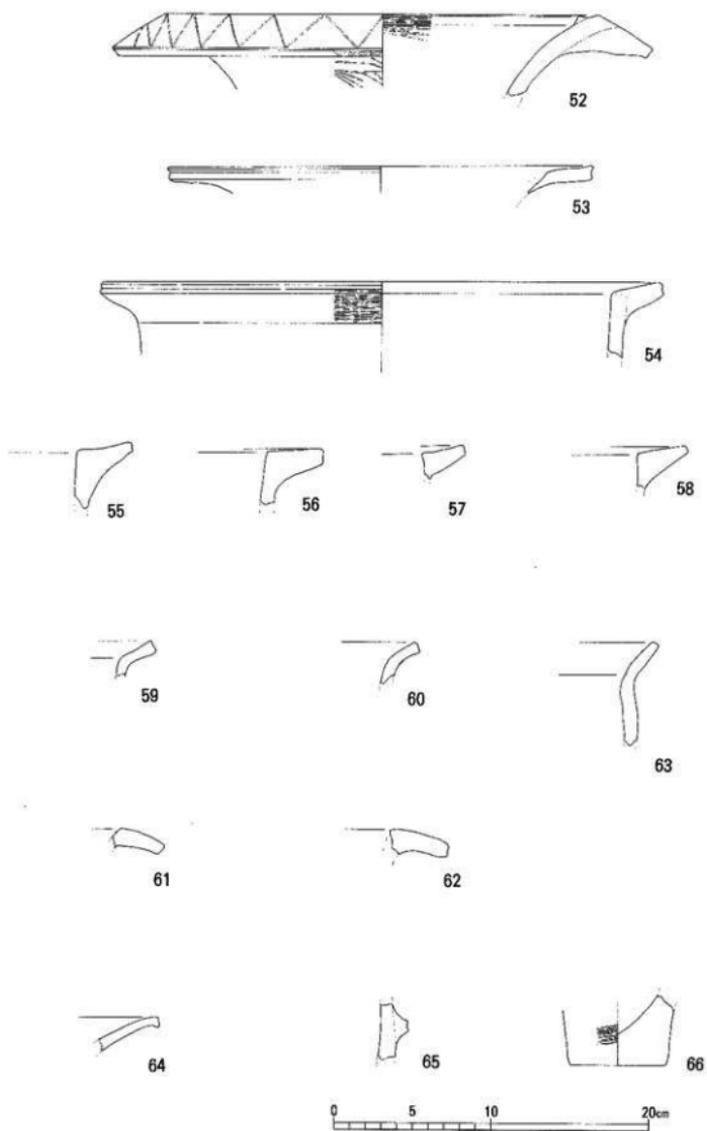
69は、壺の口縁部で、口径は、22.8センチを測る。又条口縁を持つ。

70は、磨製石鏃で、量法は、長軸で5.1センチを測り、最大幅は、2.5センチを測る。両面とも全面にミガキがかけられており、石材は、チャートと思われる。厚さは、2ミリで凹状の石鏃である。

71は、壺の口縁部で、口縁部先端に幅広の沈線を1条巡らす。口縁部下面に2条の突帯を巡らし、上部の突帯は、更に中央部分に沈線を施し、各稜線には、刻み目が施される。また下部の突帯にも、刻み目が施される。

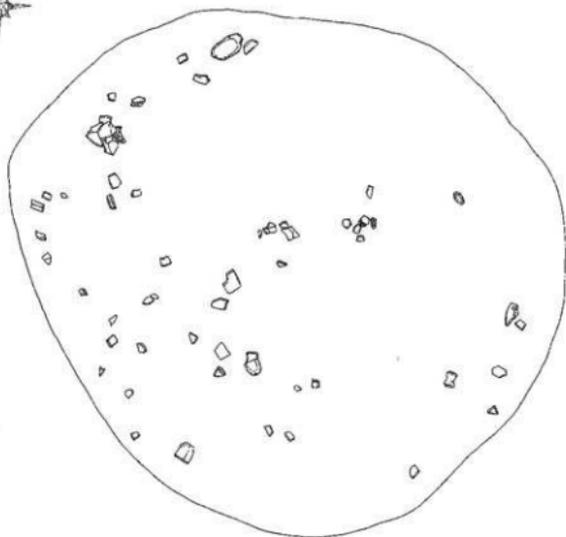
72は、壺の胴部で、三角突帯を5条巡らす。

3号住居跡出土遺物



第19図

4号住居跡遺物出土状況実測図及び土層断面図

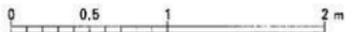


南北セクション



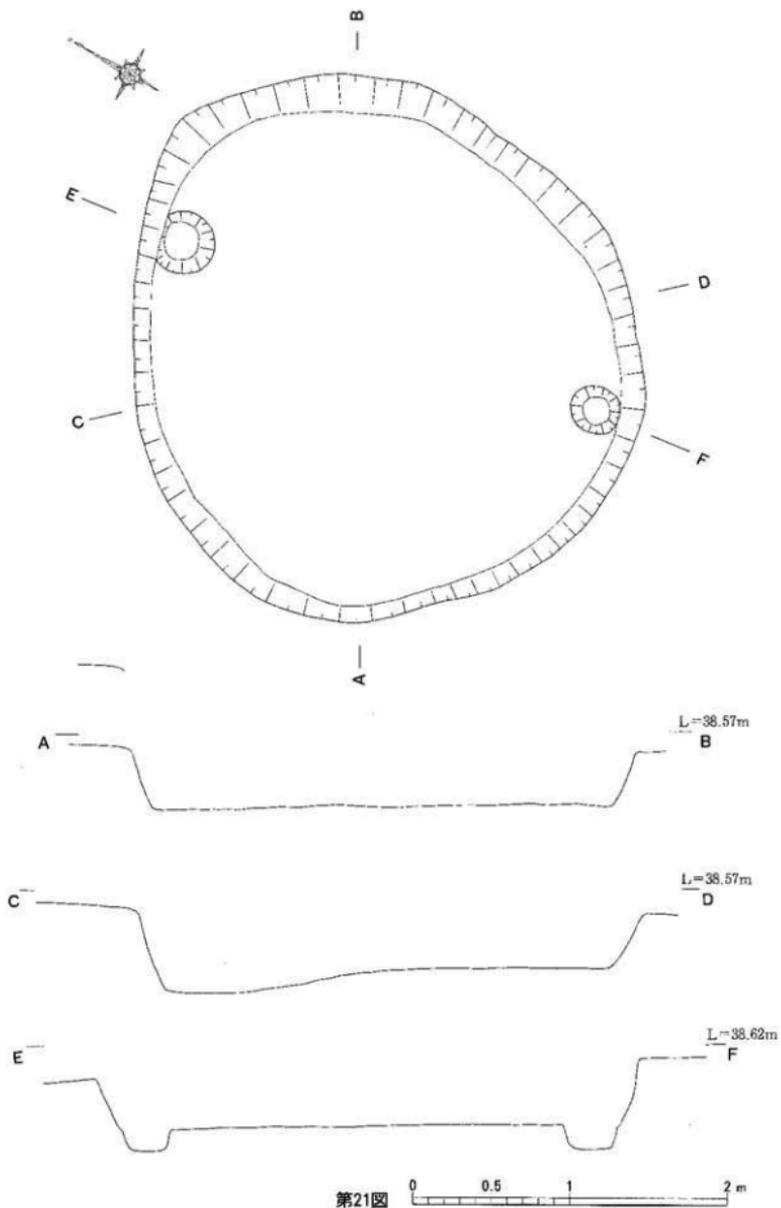
- I. 10YR 4/2 灰黄褐色 粘質 粒子が粗い
- II. 10YR 5/8 黄褐色 粘質 Iより粒子が細かい
- III. 10YR 4/4 褐色 粘質 IIより粒子が細かい
- IV. 10YR 5/6 黄橙色 粘質 IIと同程度か粒子が粗い

東西セクション



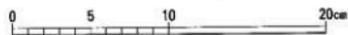
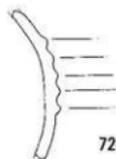
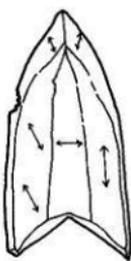
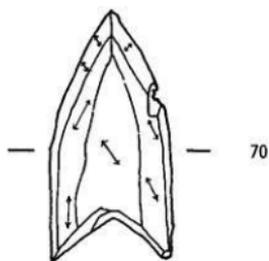
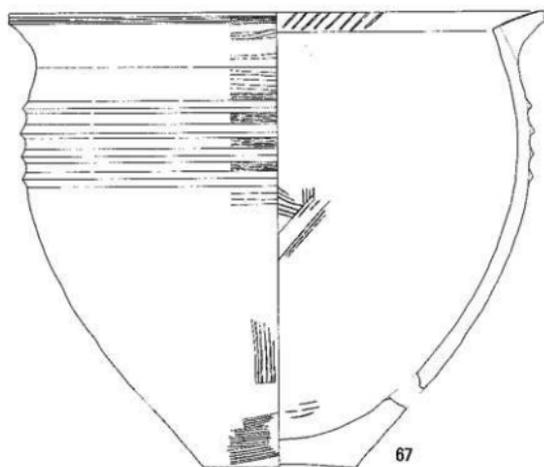
第20図

4号住居跡遺構実測図



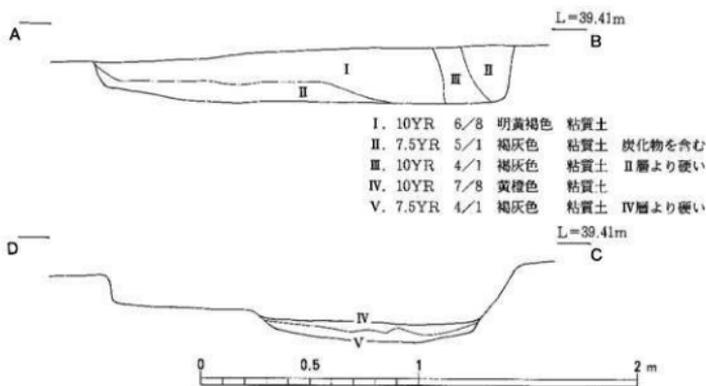
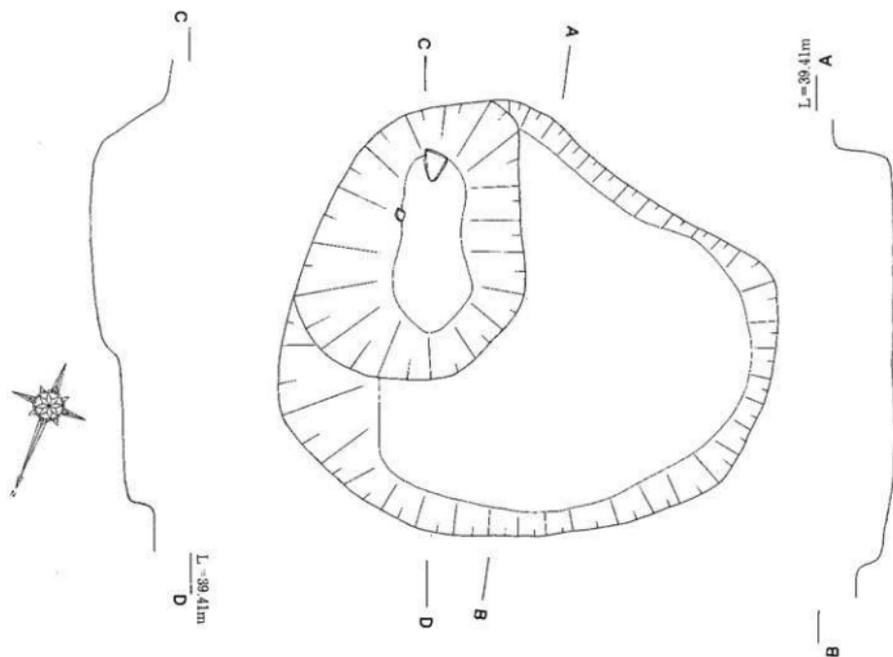
第21图

4号住居跡出土遺物



第22図

7号土坑遺物出土状況及び遺構実測図



第23図

(5) B地区出土遺物

73は、壺の口縁部で、口径は、26.0センチを測る。口縁部内側に三角突帯を1条巡らす。口縁部上面には、鋸歯紋を施す。

74は、甕の口縁部からR胴部で、口径は、38.6センチを測る。口縁部先端に面取りの跡が伺える。胴部に三角突帯を4条巡らす。

75は、小型壺で、ほぼ完形に近い形で出土した。口径は、7.4センチを測り、底径は、5.1センチを測る。また胴部最大径は、10.1センチを測る。平底を呈し、胴部は、やや下向きみである。外面全体に丁寧なミガキを施す。

76は、甕の口縁部で口縁部先端に沈線を1条施し、口縁部は、内側にやや張り出す。

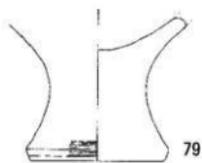
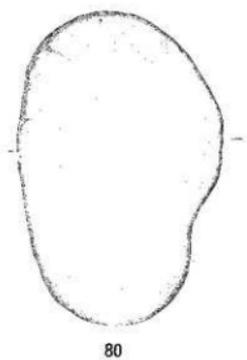
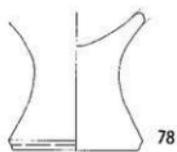
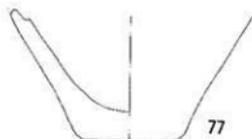
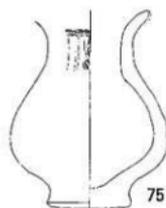
77は、甕(?)の底部で、底径は、5.8センチを測る。焼成はやや不良。底部からの立ち上がりは、約57度を測る。

78は、甕の底部で、底径は、8.0センチを測る。脚部下位に沈線を1条施す。焼成は悪く、外面色調は、明赤褐色を呈す。

79は、甕の底部で、底径は、8.6センチを測る。脚部下位に沈線を1条施す。

80は、石皿で、法量は、長軸は、39.5センチを測り、最大幅は、25.9センチを測る。厚さは、9.1センチを測る。使用痕は、両面に認められる。

B地区出土遗物



0 5 10 20cm

0 10 20cm

第24图

## 第2節 C地区の調査

### 1. 遺構

#### (1) 8号土壌

C地区は、標高37メートルから24メートルの比高差が13メートル程ある傾斜地に広がる調査区である。8号土壌は、標高24メートルの傾斜地のほぼ中央付近で検出された。ほぼ真円に近いプランを持ち、南北に1メートル60センチを測り、東西に1メートル54センチを測る。円形プランの上場と下場の比高差は、おおむね25センチから30センチを測り込み、最深部で33センチを測る。土壌内部の埋土堆積状況は、3層からなり第I層は、10YR 4/6の褐色粘質土で、多量の炭化物を含んでいた。第II層は、10YR 6/8の明黄褐色土で、第I層より粒子の細かい粘質土である。第III層は、7.5YR 5/8の明褐色の粘質土で、3層中では粒子が一番細かい。C地区で検出できた土壌は、この1基だけであるが、出土した弥生土器からみるとB地区の住居跡や土壌とは、地域的な差か、或いは、年代的な差が生じているように考えられる。ただし、<sup>14</sup>C年代測定結果では、B地区の住居跡や7号土壌とC地区の8号土壌の間には、年代的なずれはあまりないようである。このことについては、今後の課題としたい。

#### (2) 1号土器溜まり

1号土器溜まりは、C地区の南東部分に位置し、標高35メートルから34メートルの段差がついた部分に土器が集中して検出された。南北方向に約3メートル、東西方向に幅約1メートルの細長い楕円形の範囲の中に約110点の弥生土器と石皿等の石器類が出土した。丘陵部分の落ち込んだ部分に集中して出土している状況から、流土等に混じて堆積した土器群ではないかと思われる。

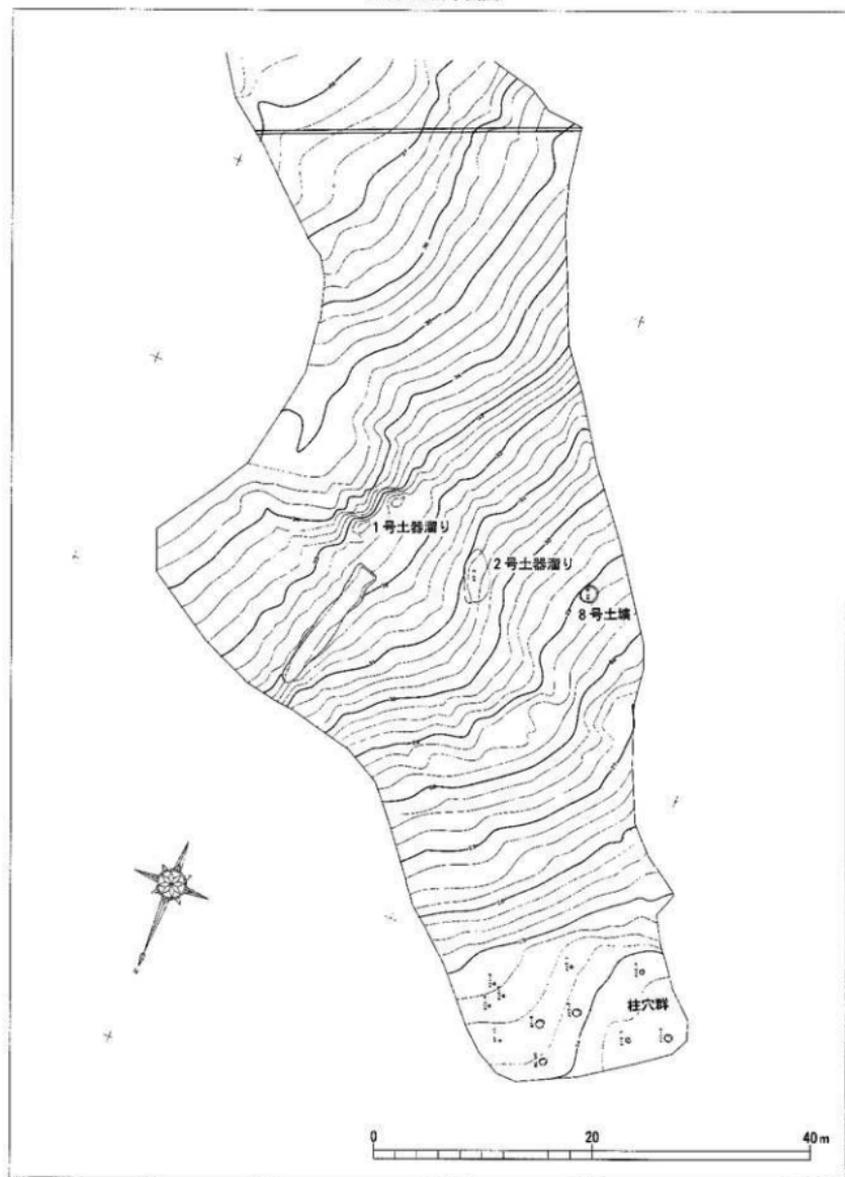
#### (3) 2号土器溜まり

2号土器溜まりは、1号土器溜まりと8号土壌のほぼ中間地点に位置しており、標高31メートルから30メートルの傾斜地に広がる。南東から北西方向に長さ約3メートル、幅約1メートルのエリアの中に約40点の土器が出土した。1号土器溜まりと同様、その地形から段差のついた丘陵部分の落ち込んだ部分に流土等に混じて堆積したのではないかと思われる。

#### (4) 柱穴跡

C地区の北西端部分で、標高25メートルから24メートルの部分に緩やかに広がる平坦地において柱穴跡が、11検出された。堀立柱跡として並ぶものはなかった。柱穴内からは、弥生土器や土器器の破片が検出されたが、柱穴に伴うものかどうかは断定できない。

C地区遺構平面図



第25図

## 2. 遺物

### (1) 8号土坑出土遺物

81は、甕の口縁部から胴部で、口径は25.2センチを測る。口縁部は、くの字を呈し、胴部は、粗いハケ目調整が見られる。色調は、鈍い黄白色を呈す。

82は、壺の口縁部付近から胴部までで、口縁部には突帯を持たず、頸部が短い。外面色調が淡黄褐色を呈す。

83は、壺の胴部下半で、三角突帯を4条巡らす。焼成は、極めて悪く、外面色調は、赤橙色を呈す。

84は、甕の胴部で、台形状の突帯を2条巡らす。胎土に小礫を多く含み、焼成は、極めて悪い。

### (2) 1号土器溜まり出土遺物

85は、壺の口縁部から胴部までで、口径は、11.8センチを測り、複合口縁を持つ。口不縁部上面に櫛描波状紋を施す。胴部は、上向きに張り、胴部最大径は、21.7センチを測る。

86は、壺の口縁部から頸部までで、口径は、11.2センチを測り、複合口縁を持つ。口縁部上面に櫛描波状紋を施す。

### (3) 2号土器溜まり出土遺物

87は、甕の口縁部で、口径は、42.3センチを測り、口縁部先端に沈線を1条施す。

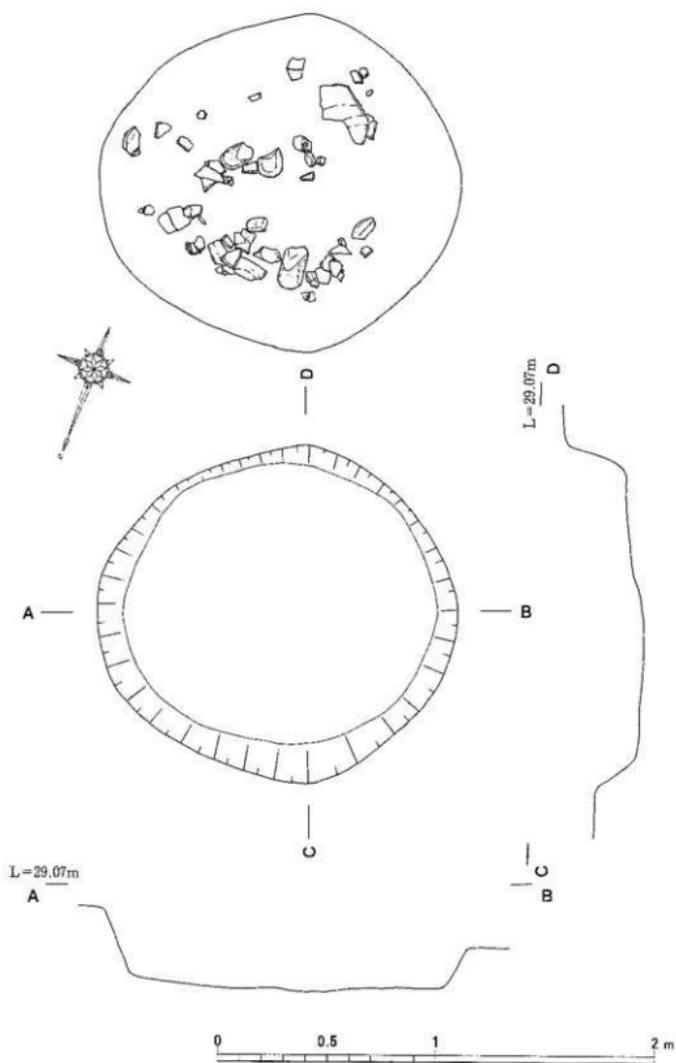
88は、壺の口縁部で、口縁部先端部分がやや肥厚きみで、口縁部先端に鋸歯紋を施す。外面色調は、淡黄橙色を呈す。

89は、壺の底部で、底径は、8.6センチを測る。底部からの立ち上がりは、約40度となる。焼成は、極めて悪い。

90は、壺の底部で、底径は、8.4センチを測る。底部からの立ち上がりは、約50度となる。

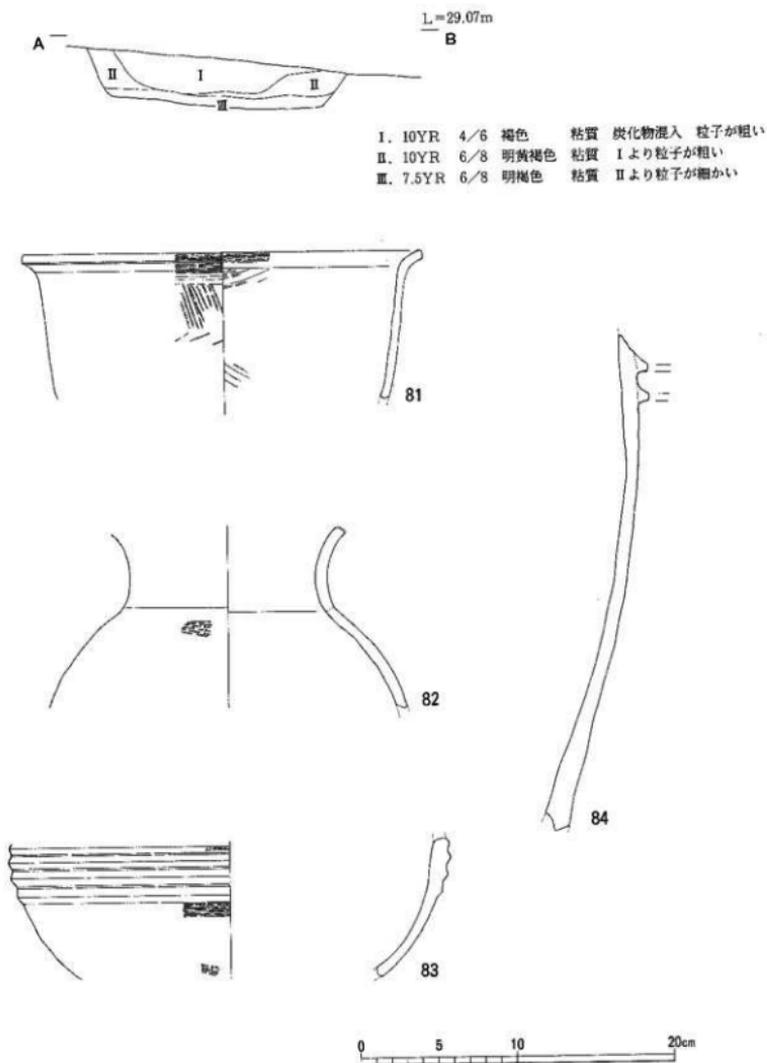
91は、甕の底部で、底径は、6.6センチを測る。外面は、粗いハケ目調整が施される。底部からの立ち上がりはきつく74度を測る。

8号土坑遺物出土状況及び遺構実測図



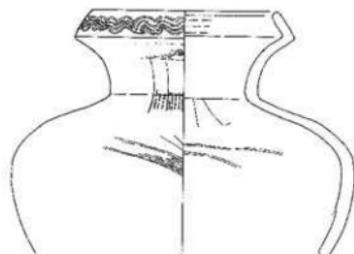
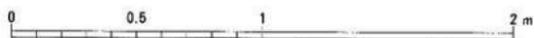
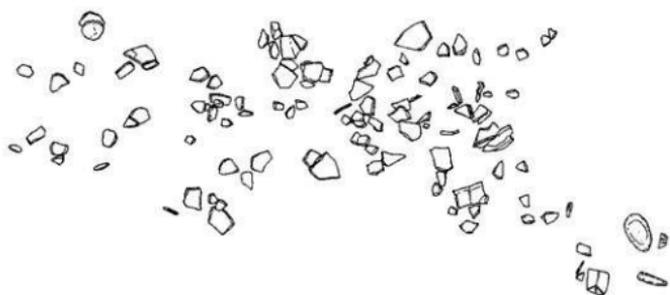
第26図

8号土壌土層断面図及び出土遺物

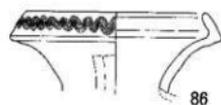


第27図

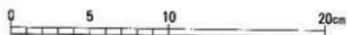
1号土器溜まり遺物出土状況実測図及び出土遺物



85

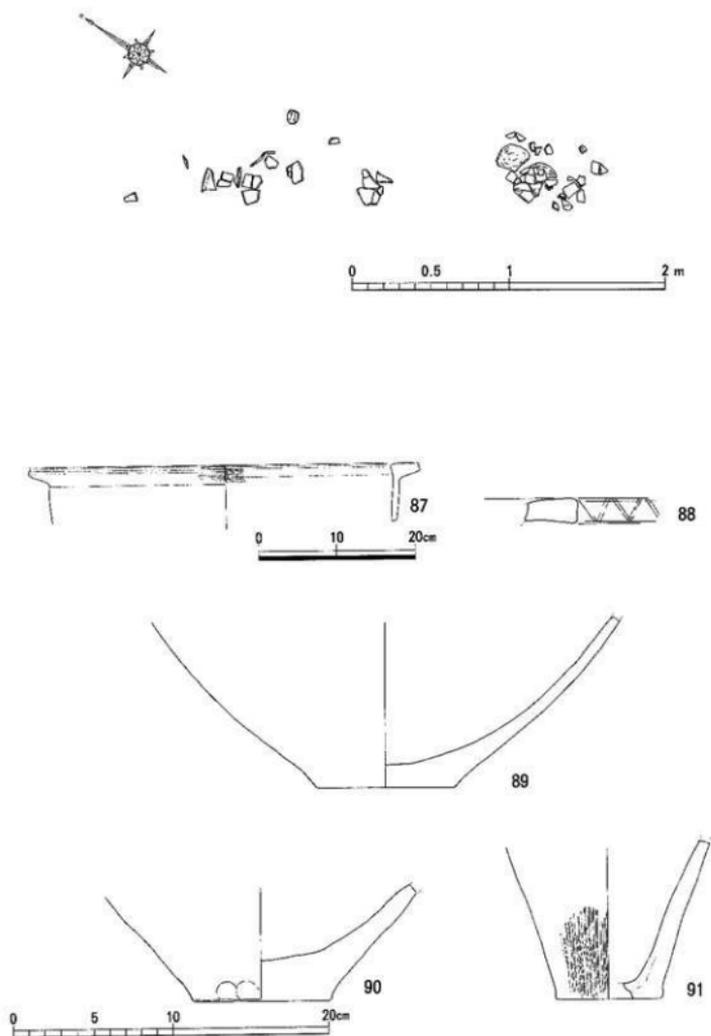


86



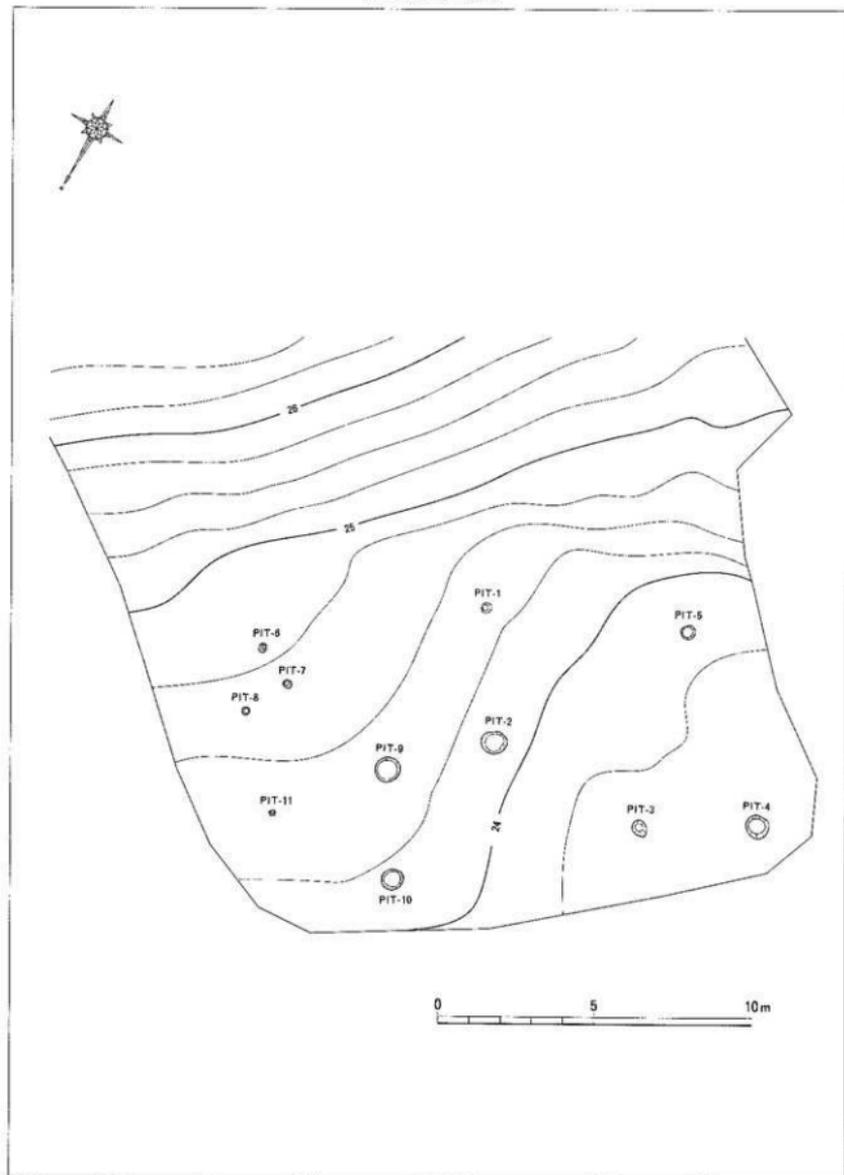
第28図

2号土器溜まり遺物出土状況実測図及び出土遺物



第29図

柱穴跡遺構平面圖



第30圖

#### (4) C地区出土遺物

92は、甕の口縁部から胴部で、口縁部先端に面取りの跡が見られる。胴部に三角突帯が3条施される。

93は、甕の口縁部から胴部で、口径は、23.2センチを測る。口縁部先端は、丸みを帯びる。口縁屈曲部に丸みを帯びた突帯を持ち、その突帯には、刻み目が施される。胎土には、小礫を多く含む。

94は、甕の完形品で、口径は、23.0センチを測り、器高は、23.3センチを測る。また、底径は、4.0センチを測る。胎土には、小礫を多く含む。

95は、高環の坏上部分で、胎土には、小礫を含み、焼成は悪い。

96は、甕の口縁部から胴部で、くの字口縁を持つ。口縁部先端は、やや肥厚ぎみである。

97は、小型丸底壺で、胴部最大径は、8.6センチを測る。胎土には、砂粒を含む。

98は、ミニチュア土器の底部破片で、底径は、3.2センチを測る。外面に指頭痕が見られる。

99は、ミニチュア土器の底部破片で、底径は、4.8センチを測る。脚部下位に面取り痕が見られる。

100は、大甕の口縁部から胴部で、口径は、46.6センチを測り、口縁部先端及び突帯先端に沈線を1条巡らす。胴部突帯は、タガ条に巡る。

101は、甕(?)の破片で、三角突帯に深い刻み目を施す。

102は、壺の口縁部で、口径は、23.0センチを測る。口縁部内側は、やや張り出しを持ち、口縁部先端に沈線を1条巡らす。外面調整は、ハケ目調整が顕著に見られる。

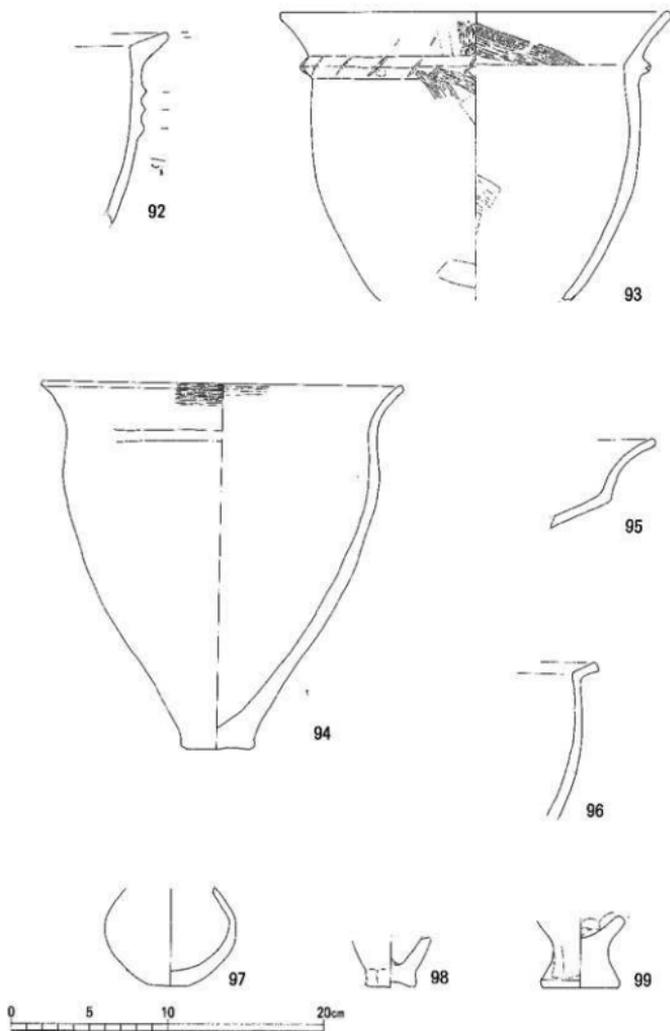
103は、甕の口縁部から胴部で、口径は、22.5センチを測る。胴部は、やや張り出し、外面色調は、黄橙色となる。

104は、甕(?)の底部で、底径は、5.0センチを測る。底部からの立ち上がりは、きつめである。また胎土に小礫を多く含む。

105は、甕の底部で、底径は、8.1センチを測る。底部は、丸底に近く安定が悪い。外部調整は、粗い。胎土には、小礫を多く含む。

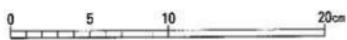
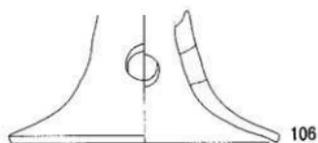
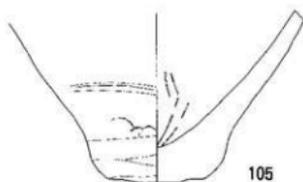
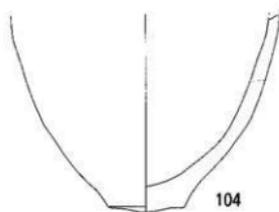
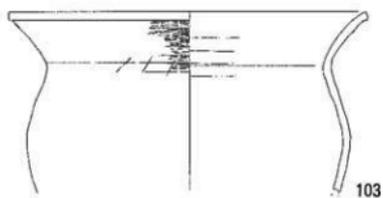
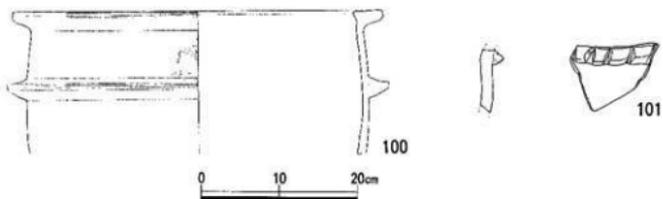
106は、高環の脚部で、底径は、19.7センチを測る。脚部には、直径約2.0センチの円形の透かしが施される。外面色調は、鮮やかな橙色を呈し、胎土には、小礫を多く含む。

C地区出土遺物実測図（その1）



第31図

C地区出土遺物実測図（その2）



第32図

## 第四章 自然科学分析

### 第1節 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果と樹種同定

株式会社 古環境研究所 杉山 真二

#### I. 放射性炭素年代測定結果

##### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	B地区1号住居跡 Na25	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 2	B地区2号住居跡 Na173	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 3	B地区3号住居跡 Na48	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 4	C地区1号土壌 Na62	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法
No. 5	C地区1号土壌 Na62	土器付着物	酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法
No. 6	B地区1号住居跡 Na19	土器付着物	酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法
No. 7	B地区4号住居跡 Na59	土器付着物	酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法

##### 2. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代 交点(1 $\sigma$ )	測定No. (Beta-)
No. 1	2280 $\pm$ 90	-27.6	2240 $\pm$ 90	BC360, 280, 250 (BC390~180)	90963
No. 2	2020 $\pm$ 60	-28.9	1960 $\pm$ 60	AD65 (BC5~AD110)	90964
No. 3	2220 $\pm$ 70	-28.5	2160 $\pm$ 70	BC185 (BC355~290) (BC230~75)	90965
No. 4	1960 $\pm$ 60	-27.6	1910 $\pm$ 60	AD100 (AD55~160)	90966
No. 5	2060 $\pm$ 60	-28.0	2020 $\pm$ 60	BC5 (BC60~AD65)	90967
No. 6	2010 $\pm$ 60	-24.3	2020 $\pm$ 60	BC5 (BC60~AD65)	90968
No. 7	2150 $\pm$ 50	-25.7	2140 $\pm$ 50	BC175 (BC200~75)	90969

### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ は補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

## II. 影平遺跡出土炭化材の樹種固定

### 1. 試料

試料は、放射性炭素年代測定に用いられた試料のうち、No 1～No 4の4点である。

### 2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面 (木材の横断面・放射断面・接線断面) を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は、これらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

結果を表 I に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。図版に各断面の顕微鏡写真を示す。

表 I 影平遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料	樹種 (和名/学名)
No 1	散孔材 diffuse-porous wood
No 2	クスノキ Cinnamomum camphora Presl
No 3	コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis
No 4	散孔材 diffuse-porous wood

#### a. コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 図版 1

横断面: 中型から大型の道管が、1～数輪幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものとは広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30cm、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

b. クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 図版2

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅であるが、2細胞幅のものがほとんどである。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築などに用いられる。

c. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在することがろうじて確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は小片であり、保存状態が悪く散孔材より詳しい同定は困難であった。

4. 所見

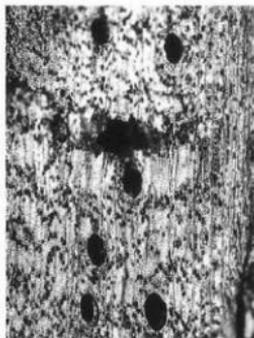
樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属とクスノキが同定された。これらの材は大木になり、木材の特性からも、柱材などの建築材に使用できる樹種である。

参考文献

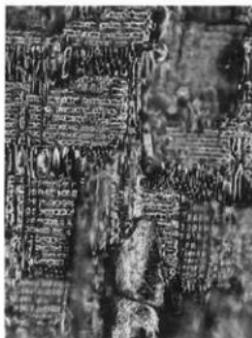
佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞 木材の構造、文永堂出版 P.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞 木材の構造、文永堂出版 P.49-100.

影平道跡出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ——— : 0.4mm



放射断面 ——— : 0.2mm

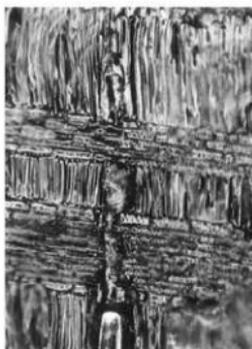


接線断面 ——— : 0.2mm

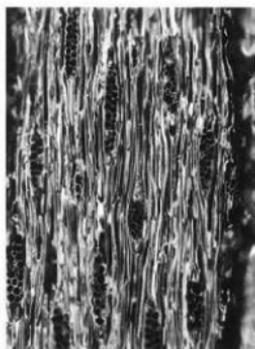
1. 炭化材 No.3 コナラ属アカガシ亜属



横断面 ——— : 0.4mm



放射断面 ——— : 0.2mm



接線断面 ——— : 0.2mm

2. 炭化材 No.2 クスノキ

## 第V章 まとめ

影平遺跡は、目前に妻手川が流れる北向きの丘陵地に位置する。今回はその丘陵上を中心に7000㎡を発掘調査した。影平遺跡は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての住居跡4軒を主体として構成された集落遺跡である。住居跡からは山ノ口式土器を中心として中溝式土器、瀬戸内系土器等が出土した。また、石皿・磨石・磨製石鏃なども出土している。影平遺跡からは、弥生中期末から後期初頭期の他に弥生後期後半の土器をはじめ、青銅製品、須恵器、土師器、陶磁器なども見つかった。影平遺跡の調査は、南那珂地域においてこれまで空白であった弥生時代中期後半から後期にかけてその様相を知ることのできる好資料を得ることができた。資料に関する検討はまだ不十分であるが、ここで現時点までのまとめをしてみたい。

まず、遺構については、B地区で検出された住居跡4軒について特記したい。これらは、いずれも径が4m強の円形プランを基調としている。プランが狭く、また検出面から床面までの深さが約30cm～40cmと浅く、そして相対する2本の支柱穴が壁際のみられることから、ベッド状の張り出しを持つ住居の内部掘り込みであった可能性も考えられる。また、住居跡の<sup>14</sup>C年代測定結果から、瀬戸内系土器を検出した影平遺跡の4号住居跡と同じく瀬戸内系の円形浮文を施した壺を出土した鹿児島県王子遺跡14号住居跡を比較すると、影平遺跡では、 $2140 \pm 50$ 、王子遺跡では $2140 \pm 25$ と、ほぼ同じ年代を示す<sup>(4)</sup>。

C地区の8号土壇については、土壇内出土の遺物の焼成が悪く土器捨て場等の跡だった可能性がある。4軒の住居跡内の遺物からは見られないNo.84の土器のような断面台形状の突帯を巡らす甕などが出土したことから、住居跡と8号土壇とは若干の時期差も考えられる。

次に遺物についてであるが、A・B地区とC地区の土器群に時期差がみられる。まずA・B地区の土器群は山ノ口式土器を中心とする弥生中期末から後期初頭のものと考えられる土器が出土した。器種は甕と壺とで構成される。器面調整は丁寧なナデやミガキが主体となり、色調は茶褐色、胎土には金雲母を含むのがほとんどである。しかし、上器No.197のようにいわゆる中溝式土器と呼ばれるものが住居跡からも少量であるが出土している。これらは、色調が白っぽく胎土に金雲母を含まない。また包含層内及び2号住居跡、3号住居跡及び4号住居跡からは、口縁部にヘラ描きの鋸歯文や直線文が描かれたり、円形浮文が付けられる、いわゆる瀬戸内系土器が出土している。影平遺跡の瀬戸内系土器は土器No.45、土器No.52、土器No.73のように在地(山ノ口式)の壺形土器の口縁部に鋸歯文を施したもの、土器No.67のように在地の甕の中でも特殊な形態をしたものの口縁部に直線文を施したもの、土器No.68のように焼成や胎土が在地のものと異なる壺の口縁部に円形浮文を施したのなどがある。

瀬戸内系土器については、宮崎県新田原遺跡6号住居跡の凹線文を施した壺の口縁部や脚部に矢羽透かしの施された高坏<sup>(5)</sup>、先述した上土遺跡においても新田原と同じような壺や高坏、ヘラ描の鋸歯文を施した壺<sup>(6)</sup>などが、また王子遺跡と同じ台地上にある中ノ丸遺跡<sup>(7)</sup>、中ノ原遺跡<sup>(8)</sup>からも凹線文土器、鋸歯文土器、円形浮文土器が出土している。山ノ口式土器は瀬戸内系土器を伴わない段階を中期、伴う段階を後期とする説があり、その中でも中村耕治氏は王子遺跡を後期前葉に位置づけている<sup>(9)</sup>。中村氏の意見に沿えば、影平遺跡の住居跡は住居内遺物の瀬戸内系土器は在地の土器に文様を施す点などから王子の時期と変わらないものと考えられるので後期前葉に位置づけられるが、山ノ口式土器自体の位置づけがまだあいまいなため今後の検討を要するものである。

次にC地区の土器群は宮崎平野において下那珂式土器と呼ばれるものを中心とする弥生後期後半のものと考えられる<sup>(10)</sup>。C地区は傾斜地であるため、A・B地区からの流れ込みと考えられる土器も多い。しかしC地区で主体となる土器は、粗いハケメ調整が行われ、胎土には1～2mm大の小礫を多量に含むのが特徴である。また器種は、甕、壺、B地区においては見られない高坏、ミニチュア土器などで構成されバリエーションに富む。

石器類はA・B地区において、打製石鏃、磨製石鏃、石皿、磨石、叩石、凹石、砥石等が出土している。特に石皿は、住居跡及び各地区から計5点出土している。また4号住居跡から1点出土した磨製石鏃は、基部に深い抉りが入る。

A地区において出土した青銅製品は、刀剣の装飾か装束部の一部であると思われる。また、B地区では須恵器の壺口縁部が、C地区では須恵器の甕胴部がそれぞれ出土している。さらにB地区においては土師器の坏や高台付きの椀が出土している。いずれも詳細については不明である。

影平遺跡では、鹿児島県大隅半島を中心に分布する「山ノ口式土器」が多量に出土したことから弥生時代中期後半から後期初頭にかけての時期には、南那珂地域が全て含まれるかどうかは今後の資料の増加を待たねばならないが、少なくともこの影平遺跡はその山ノ口式土器分布域に含まれていたと考えられる。また、鹿児島県中ノ丸遺跡の報告書の中で「この時期のこの地方（大隅地方）の遺跡からは石廂丁など積極的な稲作資料が見出せない点を考慮すると～（中略）～社会環境や生産手段を再考しなければならない。」と指摘されているように<sup>(4)</sup>、影平遺跡においても同じようなことが言えるのではないかと考えられる。しかしながら、弥生後期後半になると土器様式は宮崎中部域からの影響を強く受けるようになった可能性を示している。このことは、弥生後期の時期において土器勢力圏の移行を意味しているが、その原因については今後の調査・研究を待ちたい。

#### 《参考文献》

- (6) 立神次郎他 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』34 鹿児島県教育委員会 1985
- (7) 石川悦雄 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描(Mk. II)」『宮崎考古』9 1984
- (8) 新東兎一 「中ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』48 鹿児島県教育委員会 1989
- (9) 新東兎一 「中ノ丸遺跡(II)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』52  
鹿児島県教育委員会 1990
- (10) 中村耕治 「弥生時代(櫛溝文土器・瀬戸内系土器のありかたと時期について)」  
『鹿児島考古』20 1986

第2表 弥生土器観察表(1)

遺物名	No.	器種	部位	法 量	調 整	胎 土	挽成	色 調	備 考
6号土壇	1	甕	口縁部		口縁部上面、内側、外側ともヨコナデ	石英、金雲母 白色砂粒	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	
	2	甕	胴部		胴部外面はヨコナデ	石英、金雲母 白色砂粒	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	三角突帯が4条走る
A地区	3	甕	口縁部		風化の為不明	石英、赤色粒子 砂粒	不良	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	
	9	甕	先形部	口径 13.1cm 底径 6.2cm	口縁部内面はミガキ 口縁部外面はヨコナデ 胴部全体にミガキ	石英、金雲母 白色砂粒	良好	(外)明茶褐色～茶褐色 (内)茶褐色～明黄褐色	又条口縁
1	10	甕	口縁部	口径 16.0cm	口縁部内側はナデ 口縁部上面、外側もヨコナデ 頸部は「家なミガキ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)におい茶褐色 (内)におい茶褐色～赤褐色	
	11	甕	胴部		胴部外面はヨコナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)におい茶褐色～黒褐色 (内)赤褐色	三角突帯が4条走る
	12	甕	胃部		胃部外面はヨコナデ	砂粒、小礫	普通	(外)におい淡赤褐色 (内)淡赤褐色	三角突帯が5条走る
	13	甕	胃部		胃部外面はヨコナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)暗茶褐色 (内)茶褐色	三角突帯が5条走る
	14	甕	口縁部		口縁部外面はヨコナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)暗茶褐色 (内)茶褐色	又条口縁
	15	甕	口縁部		口縁部外面はヨコナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)暗黄褐色 (内)淡茶褐色	
	16	甕	口縁部		風化の為不明	石英、金雲母 砂粒	不良	(外)赤褐色 (内)赤褐色	口縁部内側に三角突帯が1条走る
	17	甕	口縁部		口縁部内・外面ともヨコナデ	石英、砂粒	良好	(外)におい乳白色 (内)におい乳白色	
	18	甕	口縁部		口縁部内・外面ともヨコナデ	石英、砂粒	良好	(外)におい淡黄色 (内)淡黄色	
	19	甕	口縁部 付近		口縁部内側張り出し直下に指 によるヨコナデ	石英、砂粒	良好	(外)橙色 (内)橙色	
居	20	甕	口縁部		口縁部内・外面ともヨコナデ	石英、砂粒	良好	(外)におい淡黄灰色 (内)淡黄灰色	
	21	甕	口縁部		口縁部外面はヨコナデ	石英、砂粒	良好	(外)におい淡黄灰色 (内)淡黄灰色	
	22	甕	底部	底径 4.7cm	風化の為不明	石英、金雲母 砂粒	普通	(外)淡赤褐色 (内)赤褐色	
	23	甕	底部	底径 6.05cm	風化の為不明	石英、金雲母 小礫、砂粒	普通	(外)淡赤褐色 (内)におい赤褐色	
	24	甕	底部	底径 6.8cm	風化の為不明	石英、金雲母 白色砂粒	やや 不良	(外)におい黄褐色 (内)暗茶褐色	
	25	甕	底部	底径 7.7cm	風化の為不明	石英、金雲母 砂粒	普通	(外)赤褐色 (内)淡黒褐色	
	26	甕	底部	底径 8.5cm	風化の為不明	石英、金雲母 砂粒	普通	(外)赤褐色 (内)淡黒褐色	
	27	甕	底部	底径 6.4cm	内面に指頭痕	石英、金雲母 砂粒	普通	(外)淡赤褐色 (内)淡黒褐色	
2号住居跡	28	甕	口縁部 ～胴部	口径 28.8cm	口縁部上面、外面から胴部突 帯下までヨコナデ、内面はヘ ラケズリ	石英(1～2mm大 程度の大きさ) 金雲母、砂粒	良好	(外)赤褐色 胴部下半は赤褐色～黒褐色 (内)淡黒褐色	
	29	甕	口縁部		口縁部内側、上面、外側はヨ コナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)におい淡茶褐色 (内)淡茶褐色	
	30	甕	口縁部		口縁部外側はヨコナデ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)暗茶褐色 (内)淡茶褐色	

第3表 弥生土器観察表(2)

遺構名	No.	器種	部位	法量	調整	胎土	焼成	色調	備考
2号住居跡	31	甕	口縁部		口縁部上面、外側はヨコナデ	石英(3mm程度)金雲母	良好	(外)にぶい茶褐色~淡黄褐色 (内)にぶい赤褐色~淡黒褐色	
	32	甕	口縁部		口縁部内側、上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母砂粒	良好	(外)赤褐色 (内)にぶい黄褐色~淡黒褐色	
	33	甕	口縁部~胴部	口径 28.4cm	口縁部上面、外側から突帯下までヨコナデ	石英、金雲母	良好	(外)淡赤褐色 (内)黄褐色	胴部に三角突帯が4条走る
	34	甕	口縁部~胴部	口径 30.6cm	口縁部上面、外側から突帯下までヨコナデ 胴部下半はナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗茶褐色 (内)暗黄褐色	胴部に三角突帯が3条走る
	35	甕	口縁部		口縁部内側、上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母 小礫、砂粒	普通	(外)にぶい茶褐色~赤褐色 (内)にぶい赤褐色	
	36	甕	口縁部		口縁部内側、上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母砂粒	良好	(外)暗赤褐色 (内)暗赤褐色	
	37	甕(大甕)	ほぼ完形	口径 51.2cm	口縁部内側、上面、外側から突帯下までヨコナデ	石英、金雲母 小礫	良好	(外)茶褐色 (内)黒褐色	断面M字状の突帯がタガ状に走る
	38	甕	口縁部		口縁部内側、上面、外側はヨコナデ、胴部はミガキ、ハケメ、内面はハケメ	石英(1~2mm程度のもの) 金雲母、砂粒	良好	(外)赤褐色 (内)赤褐色	口縁部内側に三角突帯が1条走る
	39	甕	口縁部		口縁部外側はヨコナデ	石英、金雲母	良好	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	又条口縁
	40	甕	口縁部~胴部		口縁部外側はヨコナデ、胴部はタテハケメ	石英、金雲母砂粒	良好	(外)にぶい灰白色~黒灰色 (内)にぶい灰白色	
	41	甕	胴部		胴部外側はヨコナデ	石英(大きめ)金雲母(大)小礫	良好	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	三角突帯が3条走る
	42	甕	胴部		風化の為不明	石英、金雲母砂粒	良好	(外)赤褐色 (内)淡赤褐色	三角突帯が4条走る
	43	甕	胴部		突帯はヨコナデ、その他外面はミガキ	石英、金雲母砂粒	良好	(外)にぶい茶褐色 (内)茶褐色	断面M字状の突帯が走る
	44	甕	胴部		風化の為不明	石英、金雲母小礫	良好	(外)にぶい淡赤褐色 ~黒灰色 (内)淡赤褐色	三角突帯が5条走る
	45	甕	口縁部	口径 21.4cm	口縁部内側、上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)にぶい淡褐色 (内)灰黄褐色	口縁部内側に三角突帯が1条走る。口縁部上面に縦溝文を施す。
	46	甕	口縁部	口径 26.9cm	口縁部内側はミガキ、口縁部外側はヨコナデ	石英、金雲母砂粒	良好	(外)にぶい茶褐色 ~淡赤褐色 (内)にぶい茶褐色	又条口縁
	47	甕	口縁部~胴部	口径 31.0cm	風化の為不明	赤色粒了、砂粒	普通	(外)淡黄褐色~淡赤褐色 (内)にぶい黄褐色	胴部にやや幅広いの三角突帯が1条走る
	48	甕	口縁部~胴部	口径 27.2cm	口縁部はヨコナデ	石英砂、砂粒 (赤色粒了六)	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	
	49	甕	底部(脚部)	底径 7.2cm	脚部はタテハケメ、脚部下位はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)にぶい赤褐色 (内)淡茶褐色	脚部下位に1条の沈線を施す
	50	甕	脚部	底径 6.3cm	脚部はタテハケメ、脚部下位はヨコナデ、内面は指頭痕が残る	石英、金雲母砂粒	良好	(外)淡茶褐色 (内)明赤褐色	脚部下位に1条の沈線を施す
51	甕	底部	底径 9.5cm	外面に指頭痕が残る	小礫	良好	(外)にぶい黄褐色 (内)明赤褐色	上げ底	
3号住居跡	52	甕	口縁部	口径 27.3cm	口縁部内側、上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母砂粒、礫石	良好	(外)暗茶褐色 (内)淡灰黄褐色	口縁部内側に三角突帯が1条走る。口縁部上面に縦溝文
	53	甕	口縁部	口径 26.8cm	風化の為不明	赤色粒子、砂粒	普通	(外)淡黄褐色 (内)桃白色	
	54	甕	口縁部	口径 35.4cm	口縁部外側はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗赤褐色 (内)にぶい黄褐色	
	55	甕	口縁部		口縁部上面、外側はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)にぶい赤褐色 (内)暗赤褐色	

第4表 弥生土器観察表(3)

通稱名	No	器種	部位	法 量	調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
3号	56	甕	口縁部		風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子	不良	(外)にふい赤褐色 (内)淡赤褐色	
	57	甕	口縁部		風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	普通	(外)明赤褐色 (内)にふい黄褐色	
	58	甕	口縁部		口縁部の内側と外側はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	普通	(外)にふい茶褐色 (内)明赤褐色	
	59	甕	口縁部		口縁部の内側と外側はヨコナデ	石英、金雲母 赤色粒子 白色粒子、砂粒			
	60	甕	口縁部		口縁部の内側と外側はヨコナデ	石英、赤色粒子	良好	(外)にふい黄白色 (内)黄白色	
	61	甕	口縁部		風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	普通	(外)淡茶褐色 (内)淡赤褐色	
	62	甕	口縁部		風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	良好	(外)黒灰色 (内)にふい黄褐色	
	63	甕	口縁部		風化の為不明	小石(1~2mm)	普通	(外)にふい黄白色 (内)にふい黄白色	
	64	甕	口縁部		口唇部はヨコナデ	細かい赤色粒子	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	
	65	不明	胴部		胴部外面はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	良好	(外)明赤褐色 (内)暗赤褐色	断面M字状の突帯が1条通る
66	甕	底部	底径 5.9cm	外面にハケメ	石英、砂粒 赤色粒子	不良	(外)淡明赤褐色 (内)淡黄褐色		
4号	67	甕	完形品	口径 34.2cm 底径 5.9cm 器高 29.0cm	外周は口縁部から突帯下までヨコナデ、胴部はタテハケメ、底部付近がヨコナデ、内面は胴部上位がヨコナデ、中位がナメハケメ	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	良好	(外)にふい灰黄褐色~ 灰黒色~明赤褐色 (内)灰白色~にふい灰黄褐色	口縁部へうきりの3本程度の凹溝を有す。胴部には三角突帯が4条通る。底部は中央ややより黄褐色の平底
	68	甕	口縁部	口径 27.9cm	風化の為不明	石英、赤色粒子 白色粒子、砂粒	普通	(外)明赤褐色 (内)明黄褐色	口縁部上面に直径9cm1個位の円形浮文を施す
	69	甕	口縁部	口径 22.8cm	口縁部外面はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	良好	(外)暗茶褐色 (内)茶褐色	又条口縁
	71	甕	口縁部		口縁部外面はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗茶褐色 (内)暗黄褐色	口縁部近くに斜線を施した3本の突帯、上部突帯には中央に凹溝を施しそれぞれに頸部を有す
	72	甕	胴部		胴部外面は突帯の上下がミガキ、突帯部分はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗茶褐色 (内)明黄褐色	胴部は三角突帯が5条通る
B	73	甕	口縁部	口径 26.0cm	口縁部はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	口縁部の内側に三角突帯を1条通らす
	74	甕	口縁部~胴部	口径 38.6cm	風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	胴部三角突帯が4条通る
	75	小型甕	口縁部付近~底部	底径 5.1cm	口縁部内側はミガキ、口縁部外側はヨコナデ、胴部外面は丁寧なミガキ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)黒褐色~暗茶褐色 (内)黒褐色~暗黄褐色	
	76	甕	口縁部		口縁部はヨコナデ、内面にハケメ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗赤褐色 (内)暗赤褐色	
	77	甕?	底部	底径 5.8cm	風化の為不明	石英、赤色粒子 砂粒	やや不良	(外)にふい黄褐色 (内)にふい黄褐色~灰色	
B	78	甕	底部	底径 8.0cm	胴部下位はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	やや不良	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	胴部下位に沈線を1条通らす
	79	甕	底部	底径 8.6cm	胴部はタテハケメ、胴部下位はヨコナデ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明黄褐色 (内)暗茶褐色	胴部下位に沈線を1条通らす
8号土壇	81	甕	口縁部~胴部	口径 25.2cm	口縁部はヨコナデ、外面胴部上位はナメハケメ、内面はナメハケメ	石英、赤色粒子 砂粒	良好	(外)にふい黄白色 (内)にふい黄白色	
	82	甕	口縁部近く~胴部上半		外面は胴部がヨコナデ、胴部はナメハケメ	石英、金雲母(少量)、赤色粒子 白色粒子、砂粒	不良	(外)淡黄褐色~灰黒色 (内)淡黄褐色~灰白色	

第5表 弥生土器観察表(4)

遺物名	No.	器種	部位	法量	調 整	胎 土	染成	色 調	備 考
8号土坑	83	甗	胴部 下半	胴部最大径 28.2cm	外面は突帯下までヨコナデ、 胴部下位はナナメハケ	石英、金雲母 白色粒子	不良	(外)赤褐色 (内)暗茶褐色	胴部に突帯が4条通 る
	84	甗	脚部		外面は突帯部分はヨコナデ、 胴部下位はタテハケ	石英(1~2mm大) 金雲母(少量) 小礫(1~13mm大) 砂粒	やや 不良	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	断面台形状の突帯が 2条通る
土器溜まり	85	甗	口縁部 ~胴部 下半	口径 11.8cm	外面は口縁部はヨコナデ、頸部から胴 部上半はタテハケ、胴部下半はナ ナメハケ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部 上半はヘラケズリ	白色粒子 赤色粒子	良好	(外)にぶい黄白色 (内)にぶい黄白色~灰黒色	複合口縁壺、口縁部 上面に波状文
	86	甗	口縁部 ~頸部	口径 11.2cm	外面は口縁部はヨコナデ、頸 部はヘラケズリ、内面は口縁 部はヨコナデ	白色粒子 赤色粒子	良好	(外)にぶい黄白色 (内)にぶい黄褐色~灰黒色	複合口縁壺、口縁部 上面に波状文
2号土器溜まり	87	壺	口縁部	口径 42.3cm	口縁部はヨコナデ、外面はミ ガキ、内面はミガキ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)暗茶褐色 (内)暗茶褐色	
	88	壺	口縁部		風化の為不明	石英、砂粒	良好	(外)淡茶褐色 (内)淡黄褐色	口縁部先端に銀歯文
	89	壺	底部	底径 8.6cm	風化の為不明	石英、金雲母 白色粒子、砂粒	不良	(外)明赤褐色 (内)にぶい赤褐色	
	90	甗	底部	底径 8.4cm	外面は底部付近に指頭痕が残 る	石英、金雲母 白色粒子、小礫(4 ~11mm大)、砂粒	良好	(外)暗茶褐色~黒褐色 (内)暗茶褐色~にぶい黄褐色	
	91	壺	底部	底径 6.6cm	外面はタテハケ	白色粒子、砂粒	良好	(外)にぶい黄褐色 (内)黒灰色	
C	92	甗	口縁部 ~胴部		外面は口縁部から突帯下まで ヨコナデ、胴部下半はハケ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	胴部に三角突帯が3 条通る
	93	壺	口縁部 ~胴部 上位	口径 23.2cm	外面は口縁部から胴部がナナ メハケ、内面は口縁部、胴部 ともナナメハケ	石英、赤色粒子 (2~3mm大)	良好	(外)黄褐色 (内)黄褐色	口縁部直下に幅広の 三角突帯に刻目を施 したものが通る
	94	壺	完形	口径 23.0cm	口縁部はヨコナデ	石英 小礫(2mm大)	良好	(外)黄褐色、黒褐色 (内)黄褐色	
	95	高坏	口縁部 ~坏部 上部		坏部下半はヨコナデ	石英、1~2mm大 の小礫	やや 不良	(外)黄褐色 (内)黄褐色	
	96	壺	口縁部 ~胴部		口縁部はヨコナデ、外面は胴 部がタテハケ、内面がナナ メハケ	石英、白色粒子 砂粒	良好	(外)淡黄褐色~灰黒色 (内)明黄褐色	
	97	小型 丸底 壺	胴部~ 底部	胴部最大径 8.4cm 底径 2.7cm	風化の為不明	砂粒 金雲母(少量)	良好	(外)明黄褐色 (内)明黄褐色	
	98	土器 土坑	底部	底径 3.2cm	外面は底部付近に指頭痕が残 る 内面はツメ形が不規則に残 る	石英、赤色粒子 砂粒	良好	(外)明黄褐色 (内)灰色	
	99	土器 土坑	底部	底径 4.8cm	外面はヘラケズリ、内面は指 頭痕が残る	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	胴部下位に面取りの 跡
	100	大壺	口縁部 ~胴部	口径 46.6cm	口縁部はヨコナデ、外面、口縁 部から突帯上まではミガキ、 突帯から下はヨコナデ、ハケ	石英、金雲母 白色粒子	良好	(外)明茶褐色 (内)明茶褐色	断面M字状の突帯を タガ状に通らす
	101	壺?	口縁部 直下(?) 胴部		風化の為不明	石英、砂粒	良好	(外)にぶい黄褐色 (内)灰黄色	やや大きめの三角突 帯に深い刻目を施す
区	102	壺	口縁部	口径 23.0cm	口縁部はヨコナデ、外面、口縁 部はタテハケ、内面はヨコ反ナ ナメハケ	石英、金雲母 砂粒	良好	(外)茶褐色 (内)暗茶褐色	
	103	壺	口縁部 ~胴部	口径 22.5cm	口縁部はヨコナデ、一部にヘ ラケズリが残る	小礫(1~3mm大)	良好	(外)明黄褐色 (内)灰色~明黄褐色	
	104	壺?	底部	底径 5.0cm	外面は底部付近に指頭痕が残 る	小礫(3mm大) 赤色粒子	良好	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	
	105	壺	底部	底径 8.1cm	外面はヘラケズリ	石英 小礫(1~4mm大)	良好	(外)にぶい黄褐色 (内)黄灰色	底部が丸底に近い形 を呈する
	106	高坏	脚部	底径 19.7cm	風化の為不明	小礫(1~4mm大)	良好	(外)明黄褐色 (内)黄褐色	脚部に円形の透かし

B地区・C地区調査前状況



B地区調査前（西から）



B地区からC地区にかけて  
調査前（南から）



C地区調査前（南東から）

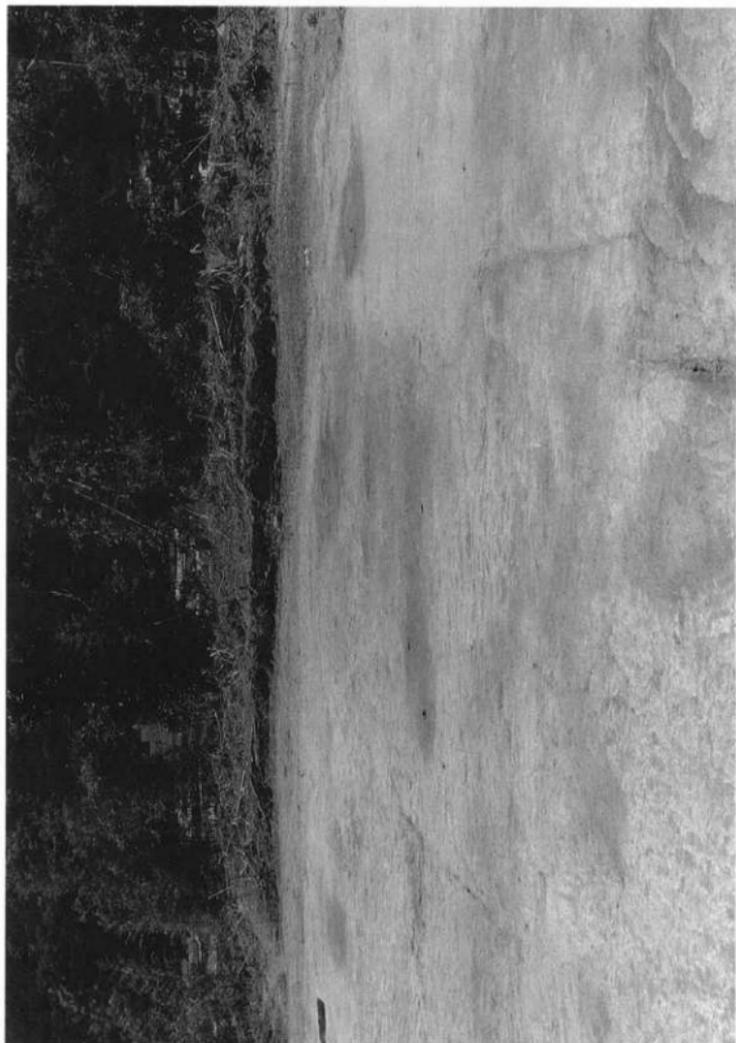
図版 2

A 地区 全景



图版 3

A地区遺構検出状況



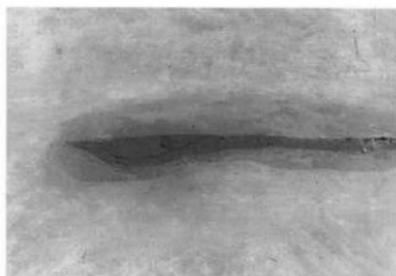
図版 4

A地区遺物検出状況（南から）

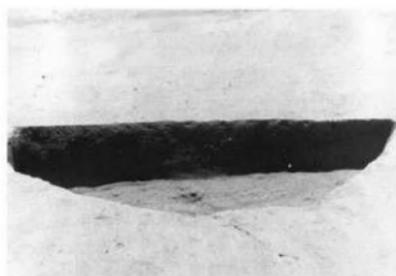


図版 5

1号～6号土壌及びその土層断面



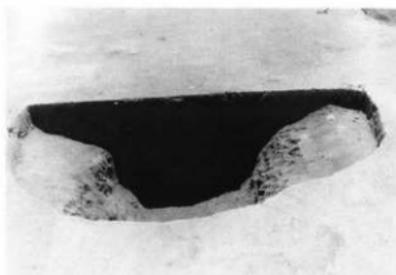
1号土壌



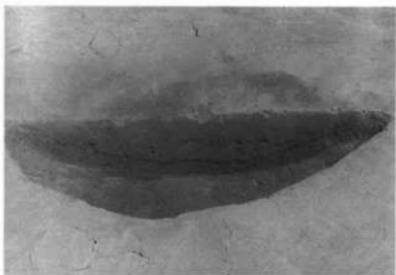
4号土壌



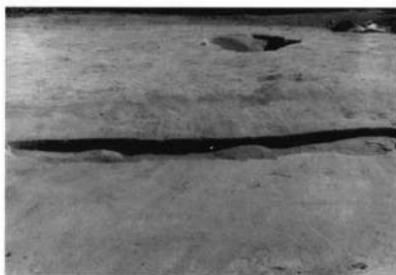
2号土壌



5号土壌



3号土壌



6号土壌

1号～6号土坑及びA地区出土遺物



試掘時出土壺



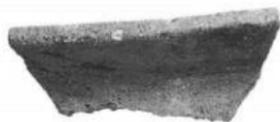
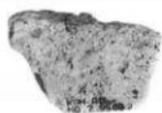
打製石鏃



青銅製品



石錘



6号土坑出土土器

図版7



B地区遺物検出状況



小型壺出土状況



2号住居跡付近出土石皿



段々畑の2段目より出土した  
弥生土器

1号住居跡遺物出土状況



图版10

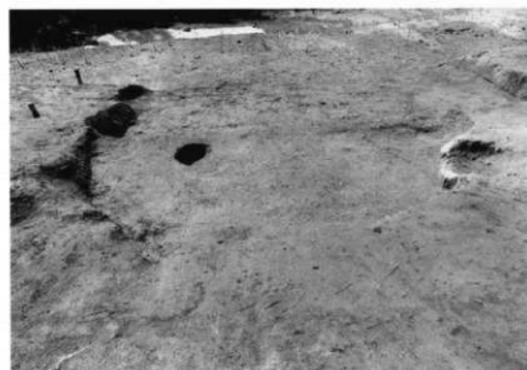
1号住居跡土層断面及び遺構検出状況



1号住居跡土層断面  
(南から)



1号住居跡土層断面  
(西から)



1号住居跡 (東から)

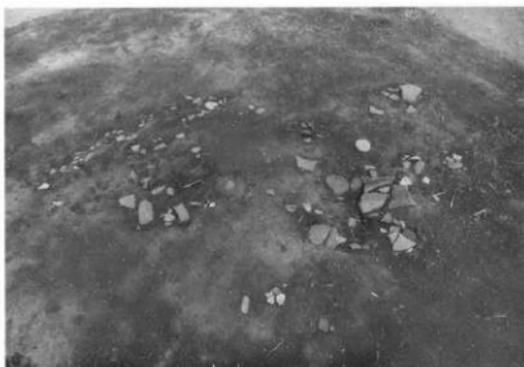
図版11

1号住居跡出土遺物

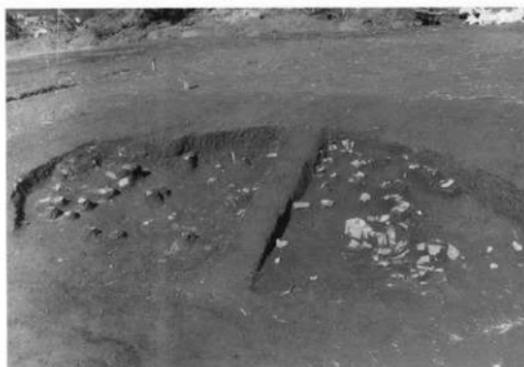


図版12

2号住居跡遺物出土状況（その1）



2号住居跡遺物出土状況  
第Ⅰ層目掘り下げ状況  
（南から）

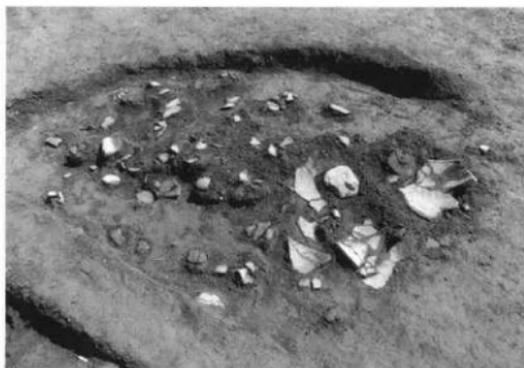


2号住居跡遺物出土状況  
第Ⅱ層目掘り下げ状況  
（西から）



2号住居跡遺物出土状況  
第Ⅲ層目掘り下げ状況  
（北から）

2号住居跡遺物出土状況(その2)



2号住居跡遺物出土状況  
第Ⅲ層目掘り下げ状況  
(北西から)



2号住居跡遺物出土状況  
第Ⅳ層目掘り下げ状況  
(南東から)



2号住居跡ベルト内遺物出土  
状況 (東から)

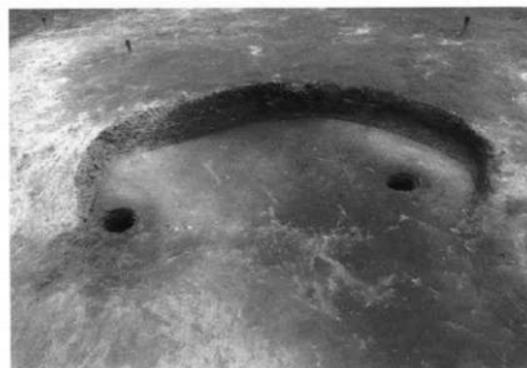
2号住居跡土層断面及び遺構検出状況



2号住居跡土層断面  
(北から)



2号住居跡土層断面  
(南から)



2号住居跡(西から)

2号住居跡出土遺物（その1）



図版16

2号住居跡出土遺物（その2）



図版17

3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡遺物出土状況  
(南東から)



3号住居跡遺物出土状況  
(西から)



3号住居跡石皿出土状況  
(南東から)

3号住居跡土層断面及び遺構検出状況



3号住居跡土層断面  
(西から)

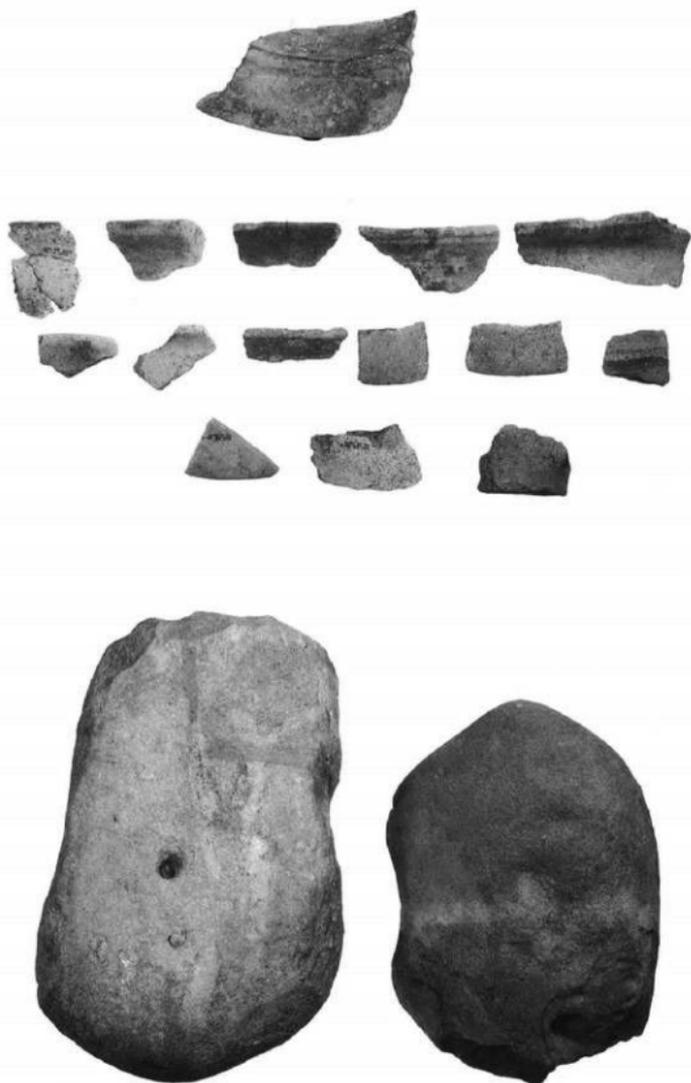


3号住居跡土層断面  
(南東から)



3号住居跡 (西から)

3号住居跡出土遺物



图版20

4号住居跡遺物出土状況



4号住居跡遺物出土状況  
(南東から)



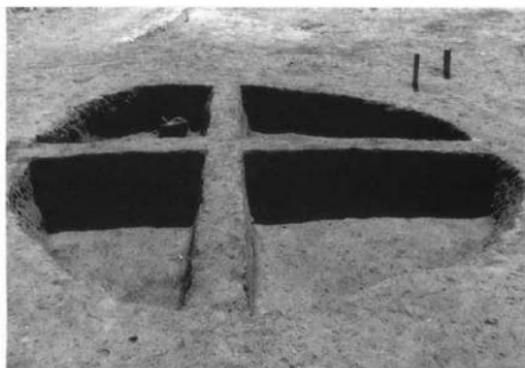
4号住居跡磨製石鏃出土状況



4号住居跡ベルト内遺物出土  
状況 (北から)

図版21

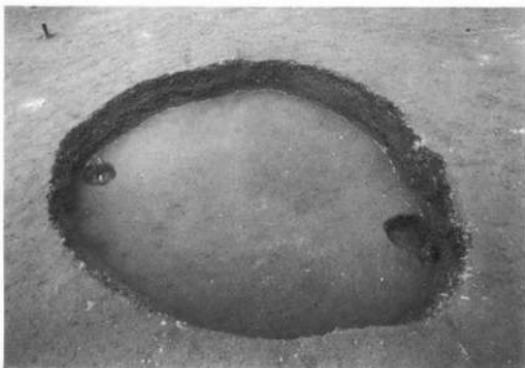
4号住居跡土層断面及び遺構検出状況



4号住居跡土層断面  
(北から)



4号住居跡土層断面  
(西から)



4号住居跡  
(南から)

4号住居跡出土遺物

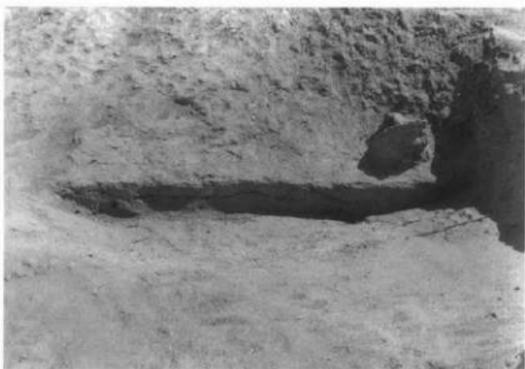


図版23

7号土坑遺物出土状況、土層断面



7号土坑、土層断面  
(西から)

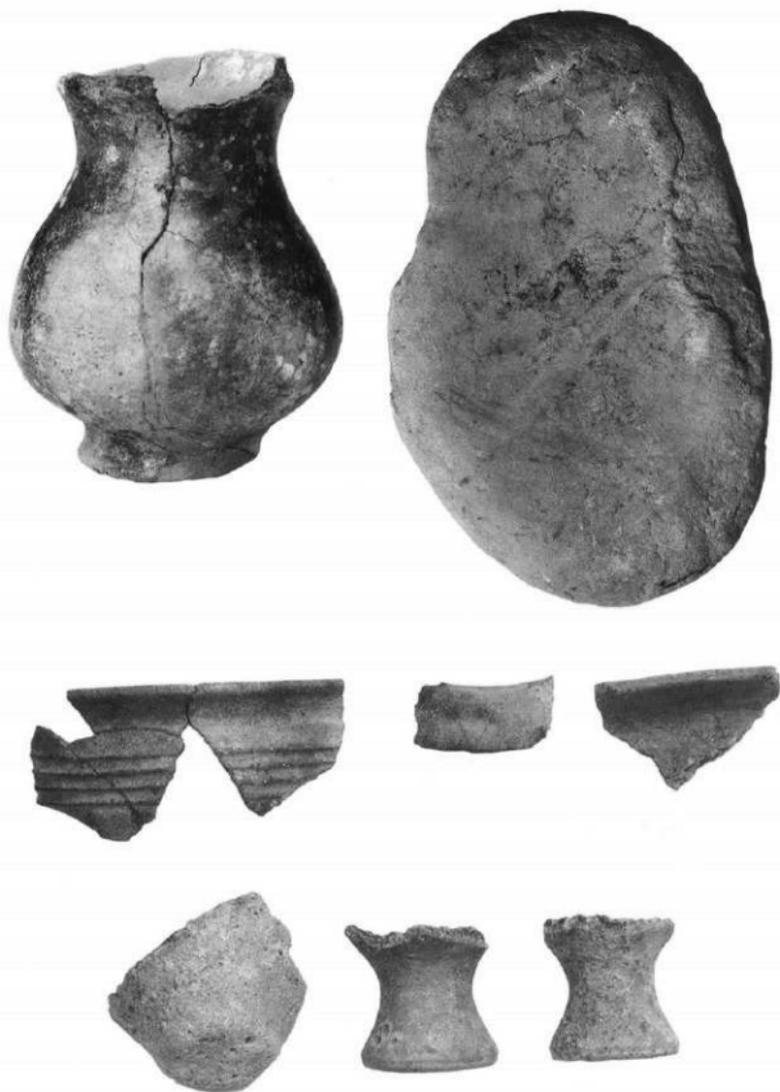


7号土坑、下部土層断面  
(南から)



7号土坑、遺物出土状況

B地区出土遺物



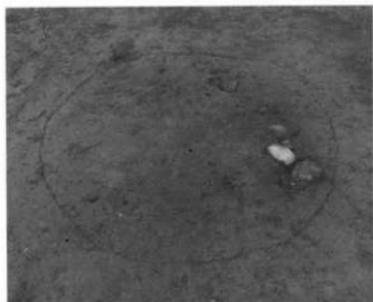
图版25

C地区全景（南東から）



図版26

8号土坑遺物出土状況、土層断面及び出土遺物



遺構検出状況（南東から）



土層断面（北から）



遺物出土状況（北から）



出土遺物

1号土器溜まり遺物出土状況及び出土遺物



遺物出土状況（東から）

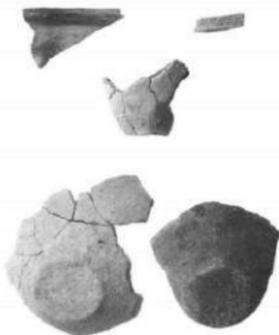


出土遺物

2号土器溜まり遺物出土状況及び出土遺物

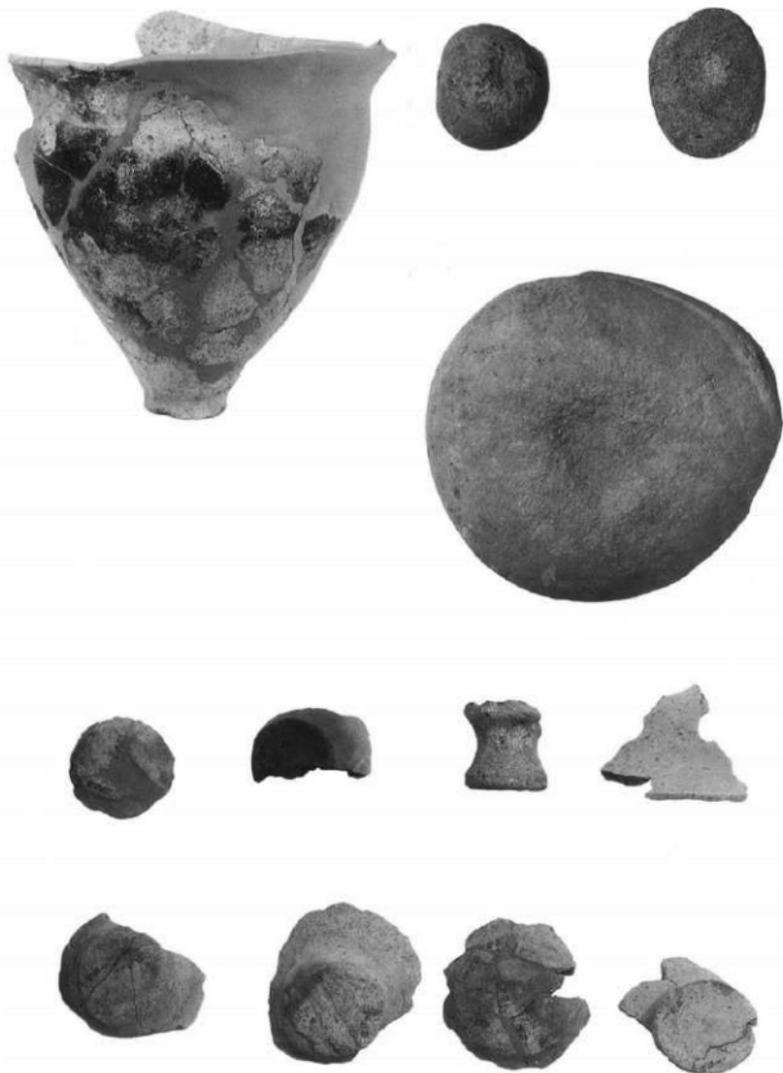


遺物出土状況



出土遺物

C地区出土遺物（その1）



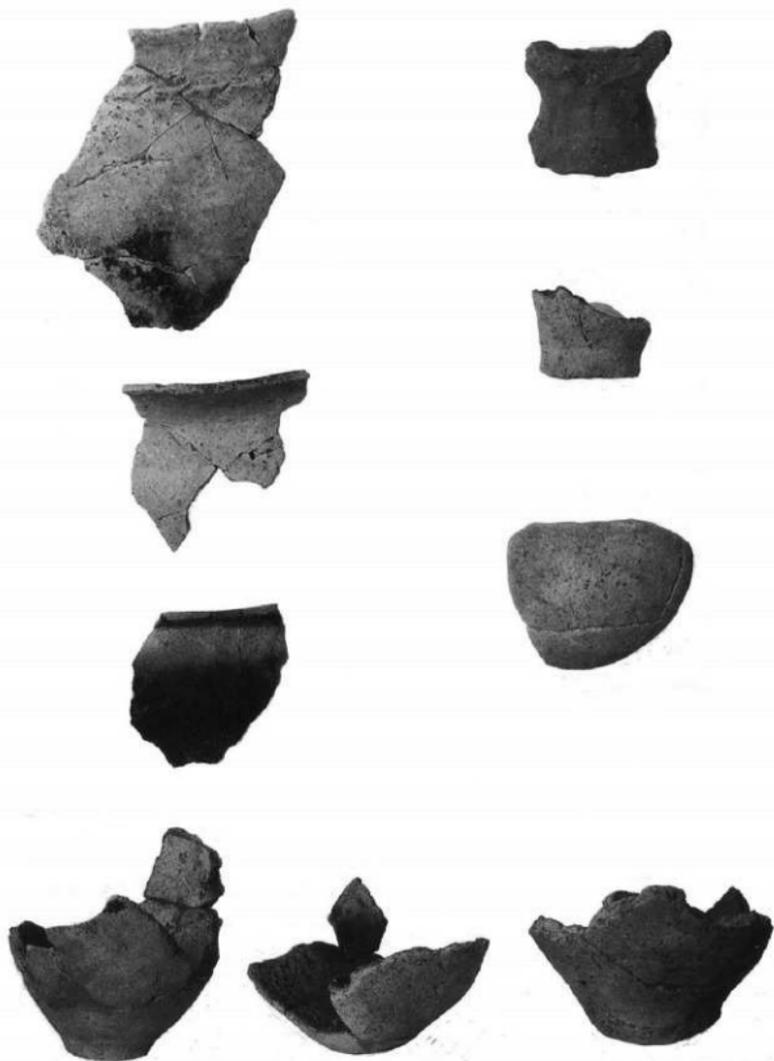
図版29

C地区出土遺物（その2）



図版30

C地区出土遺物（その3）



図版31

作業風景（東から）



現地説明会



図版32

## 編 集 後 記

影平遺跡の調査は、平成7年6月5日から開始しました。この年の夏は、ここ数年間では一番の猛暑となりました。特に梅雨の上がった7月の半ばから8月一杯は、殆ど雨の降らない厳しい環境の中での調査となりました。そういった中、調査に従事していただきました作業員の方々には、改めてこの紙面をかりてお礼を申し上げたいと思います。特に最高齢の方は、70歳を優に越えておられましたのに猛暑の中、がんばって下さり感服するばかりです。

今回の調査では、空白となっていました日南市、強いては南那珂地域の弥生時代の様相を解明していく上で、貴重な資料が検出されました。宮崎県内、九州圏内でみますと特に際だった土器や、特徴のある住居跡等が検出された訳ではありませんが、現在の宮崎市近辺や宮崎市の弥生文化と大隅半島、強いては鹿児島県を主とした南九州の弥生文化との中間地点にあたる日南市の弥生文化を研究する上では、貴重な資料を得ることができたといえるのではないのでしょうか。

東京都文京区弥生町、ここで最初に発見された土器は、それまで知られていた土器とはその特徴に違いがあり、農耕文化に伴うこの土器をその地名から弥生式土器と呼ぶようになりました。また同時に弥生時代、弥生文化という名称も一般化していくようになりました。二十四節気の一つに啓蟄という言葉がありますが、これは、これまで土の中で眠っていた動物がむくむくと土からはいだしてきて動き出すことを意味するそうです。丁度この啓蟄にあたるのは、3月5日で、この3月のことも弥生と呼びます。偶然の一致だったとしても米を作るという手段を手に入れた人々が文化的、社会的、生産的にも大きな飛躍を遂げようとする弥生時代と弥生(3月)とは、その黎明期的な響きのなんと似ていることでしょうか。

最近の最もすすんだDNA鑑定技術では、弥生時代の人骨からもその試料をサンプリングできるようになったようです。そもそもDNAとは、遺伝情報物質そのものを指す言葉で、それを構成する塩基とは、A、C、G、Tの4種類からなります。この塩基配列の特性により、人獣判定や性別判定、血縁関係などが解明されていく訳です。農耕文化が大陸から伝わってきたとする説は現在では、一般的になってきていますが、それは数多くの発掘調査の結果や研究成果によって解明されてきたことです。もちろん、人類学的な分析結果等も加味していることは、言うまでもありません。しかし、決定的な科学的裏付けは、これまでなかったように思います。前述した最先端のDNA鑑定結果では、北九州の遺跡において、甕棺墓と土壙墓から発見された人骨について、それぞれの埋葬方法別に2系統のDNAの傾向が確認されたようです。これは、時期的な差異、あるいは同時期の埋葬方法だとすれば社会的身分の差異が経済的な差異等が考えられます。こういった結果から考えますと、日本で発見された弥生人の人骨と大陸の弥生人の人骨が同じようなDNAの傾向を示せば、渡来系弥生人の立証に大きな光を与えることとなるでしょう。(第4回 土井ヶ浜シンポジウム 96 平成8年9月1日開催資料参照) もっともこれまで、人骨のクラスター分析や歯の非計測値の見地からは、それらを十分に立証してはいます。内容が少々、飛躍した感はありますがこれまで文化の広がりや年代の決定は主に土器の型式学的な分類や層位学などにより行われてきました。もちろん<sup>14</sup>C年代測定や火山灰(テフラ)分析などの科学的分析は利用されています。今後は、こういった分析方法にDNA鑑定という新しい方法を導入することにより、人どもの、文化の広がりなどが解明されていくことでしょうか。

影平遺跡では、土器型式や<sup>14</sup>C年代測定結果などから、主な時代を弥生時代中期とする集落遺跡ととらえました。いったいこの集落で暮らしていた人々は、縄文時代からの在来系弥生人だったのか大陸からの渡来系弥生人だったのか、その思いは広がるばかりです。今後、前述した最先端のDNA鑑定結果と型式学的な年代や層位学的な年代などがリンクされて、新しい史実がわかってくれば、そういったことも判明してくるかもしれません。いずれにせよ、日南市内における遺跡のデータ・ベース化は、まだまだ黎明期と言うよりも始まったばかりです。今回の調査結果が、今後の研究資料の一助として活用されることを望んで編集後記をおわりたいと思います。

<調査スタッフ>



須志田修 鎌田留次郎  
黒木正男 前田マサ子 大田原俊太郎  
谷口キヨ子 福田スエ 黒木カヨ 田畑フミ子 鎌田和枝

<整理スタッフ>



貴島芳栄 代田博文 出口美智子  
谷山英子 和田るみ子 谷口キヨ子

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かげひらいせき							
書名	影平遺跡							
副書名	-							
巻次	-							
シリーズ名	日南市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	的場文明							
編集機関	日南市教育委員会							
所在地	〒887 宮崎県日南市中央通1丁目1番地1 ☎0987-31-1145 FAX0987-24-0987							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / '	東経 ° / '	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
影平遺跡	日南市大学 平野7599番 地	45204	501	31°35'22"	131°23'51"	平成7年 6月5日 ? 同年 11月30日	7,000	都市計画 道路 園田～ 平野線 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
影平遺跡	包蔵地	弥生時代	弥生時代住居跡 4軒 土壇 8基 柱穴跡		弥生土器 須恵器 陶磁器 石皿 磨石 磨製石鏃		日南市域、南那 珂地域では、初 めての弥生時代 の集落遺跡	

日南市埋蔵文化財調査報告書 第7集

かげ ひら い せき  
影 平 遺 跡

都市計画道路園田～平野線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

編集発行 日南市教育委員会  
〒887 日南市中央通1丁目1番1号  
電話 0987-31-1145

印刷 裕勇進堂印刷  
日南市油津1-6-8  
電話 0987-23-5255